

# 護衛が道

豊秋津

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

HUNTER×HUNTERの世界で生きるボディーガードのお話。

続くかどうかは分かりません。

# 目次

N o. 008	62	ヨークシン×エピローグ							
N o. 007		旅団×ヨークシン上空	49						
N o. 006		旅団×ホテルベーチャク							
N o. 005		ノブナガ×路上	34						
N o. 004		クロロ×激突	25						
N o. 003		クロロ×セメタリービル	16						
N o. 002	8	修行×ノストラード							
N o. 001		ゼノ×邸宅	1						
N o. 014	133	劣勢×覚醒	143						
N o. 013		ネフェルピトー×開戦							
? N o. 012		補充×痕跡	125						
N o. 011	107	救出×地獄	116						
N o. 010		新しい依頼×NGL							
N o. 009		バッテラ×会食	99						
N o. 000		幕間×過去	85						
			75						



## No. 001 ゼノ×邸宅

「……はあ……はあ…… 余裕、ってやつですか？」

暗殺者が正面から来るなんて」

「いやなに、依頼人が余計な事をしてくれたのでな、儂も好きにさせてもらおうと思っての」

都会の宵闇。豪邸。そして、その庭で対峙する2人の男。

一方は、駆け出しの若いボディガード、マシロシロギヌ。もう一方は、世界の暗殺一家の前当主、ゼノゾルディック。

マシロは肩で息をしながらも、少し離れた背後の木の陰に身を隠す護衛対象を意識に入れながら、油断なくゼノゾルディックを睨む。

「意にそぐわぬ依頼人なら、退いてくれると…… ありがたいんですけどねっ」

そう言いつつマシロは接近戦を仕掛ける。

左手の銃で牽制しつつ、右手のナイフで斬りかかる。

「そういう訳にはいかん。いい依頼人ばかりではない中で、それでも依頼をこなすのがプロというもんじゃ」

激しい応酬の中で交わされる会話。マシロが攻めている様に見えても、精神的優位はゼノにあった。

鋭く迫るナイフを身を屈めて避けるのと同時に足払いをかけるゼノ。マシロは跳んで回避する。そこに叩き込まれる攻防力を高めたゼノの蹴り。

素早くコンパクトながらも絶大な威力を秘めたこの蹴りは、念能力者といえども並の者が受けたならそれだけで行動不能に陥る程のものだった。

だがマシロは瞬時に凝りによって防御力を集め完璧にガードしてみせる。

再び離れる両者の間合い。

「ほう……」

思わず漏れるゼノの感嘆の声。ゼノにしてみればマシロはまだまだ未熟で、隙もちらちら見て取れたものの、今見た流の技術。それは、才能の大きさを感じさせられるものだった。

「お主、年は幾つじゃ？」

突然投げられる殺し合いの場に似つかわしくない質問。

マシロは痺れる左腕を気取られないようにしつつ、間を置くために答える。

「……19」

「ほう、19！ その若さでその技量。いや、実に見事じゃ。」

ゼノは愉快だった。

仕事前、依頼人が暗殺対象の恐怖を煽って楽しむために、ゾルディック家を雇ったと告げていたのだが、その事への不愉快さはもう消えていた。

代わりに感じるのは、若い才能を前にした高揚。

この闘いを生き延びることが出来たなら、この若者にとって何より得難い経験になるだろう。

「どれ、少しばかりワシの本気をみせてやるか」

ゼノの右腕に生み出される、オーラの龍。

未だ頭しか見せていないが、その偉容にマシロは肌が粟立った。いくら上手く防御しようとも、くらえば深傷は免れない。

明確に形を取り始めた死。

トドラゴンランス  
// 牙 突!!! //

猛然と迫り来る龍の罅。

全力で回避するマシロ。が、龍は追従して向かってくる。

龍を自分ではどうこうできないと感じたマシロは、操者たるゼノに向かって走り出す。

自分を貫こうとする龍からの致命傷だけは避けながら、傷だらけになって彼我の距離

を詰めていく。

その距離が一息になった時、ゼノは伸びきった龍を消し、左腕に新たな龍を作つて迎え撃つ。

ゼノをもつてしても、決着を確信する必殺の間合い。

ガ―デイウス・ウォール  
// 天狐の産衣!!! //

マシロを貫くかにもえた左腕の龍は、突然現れた壁に行く手を阻まれる。一瞬後には壁を砕きその勢いを再開させるも、既にその場にマシロの姿は無く、龍はただ前進して行く。

驚愕するゼノ。

マシロは壁の反動を利用して、その身をゼノの左側に潜り込ませた。

全弾発射され尽くす銃弾。

「グウ……ッ……!!」

周によつて念を纏つたそれは、瞬時に龍を消し防御に回つたゼノをしても無傷というわけにはいかなかった。

二度目は無い勝機を掴んだマシロは全力で中段蹴りを放つ。

吹き飛ばすゼノ。

灌木を突き破り、手入れされた花壇を荒らし、その先の庭石にぶつかる。



「……ハア……ハア……ッ」

マシロは、座り込みたい衝動に駆られながらも、どうにか身を奮い起たせて油断無く前を睨む。

と、背後に感じる気配。

振り返ると、震えながらもマシロに言われた通り隠れている護衛対象に迫る小さい人影。

よく見ればおかつぱの子供で、その手にはナイフが握られている。

「ッ……ッ……」

マシロは慌てて能力を発動する。

心臓にナイフが突き立てられそうになる寸前、護衛対象のスーツの襟のバッジ、そこにあつた小さな宝石がさらさらと碎ける。

そして現れる透明な壁。

「なに!!」

勢い余つて弾かれるナイフ。壁には傷一つ付いてはいない。

「ッ……」

マシロの接近に気付いたカルトが反撃しようとするが、腕を取られ首に手刀を落とされて気絶する。

「どうです？　ここは一度退いてくれませんか？」

歩いてこちらにやって来るゼノに向かつてそう問いかけるマシロ。

「はあ…見学だけさせるつもりだったんじゃないがのオ。後で躡け直さねばなるまいて」

ところどころ服がほつれ、汚れてはいるものの、先程のマシロの猛攻が嘘のように、ゼノ自身はいたって元気だった。

カルトの首元に突き付けられているナイフを一瞥し、嘆息する。

「ま、仕方があるまい。可愛い孫の命じゃ。ここは、一度態勢を立て直すとするかのオ」  
腰が抜ける様に倒れながら安堵する護衛対象。

「じゃが、それは一時的にじゃ。依頼が無くなった訳ではないのを覚えておくことじゃ」  
そう言つてカルトを受け取つたゼノは、消える様に立ち去つて行く。

「はあくくく。助かつた」

緊張の糸が解け安堵するマシロ。

（あれが上から数えた方が早いっていう実力者か……）

皮肉な事に、カルトの乱入が生死を分ける分水嶺だった。そうでなければ自分は死んでいたと確信させるだけの力の差をマシロは痛感していた。

それでも命は拾えたと気を取り直す。

「さて、ランバートさん。休んでる暇は無いですよ。

死なないためにもゾルディックに暗殺を依頼した奴に話をつけに行かなければ」  
そう言つてマシロは護衛対象に肩を貸して屋敷に向かつて歩いて行く。

きつとゼノは、今回の暗殺依頼は依頼人の方から取り消されると予感しつつも立ち去つて行つたのだろう。

将来有望な若者に敬意を表して。

そして、この日を境にしてマシロⅡシロギヌの名は裏社会に轟き始める。

世界一の暗殺者から依頼人を守り抜いた只一人の人間として。

## No. 002 修行×ノストラード

ゼノとの一件以来、護衛依頼が爆発的に増加した。

それまでの開店休業ぶりが嘘の様な依頼数だったが、しかしマシロはその全てに断りを入れた。登録していた仲介業者との契約も打ち切った。

修行の必要性を痛感したためである。

そこらのマフィアが束になろうとどうとでも出来る自信はあったが、ゼノとの間に広がる深く広い海溝の如き差を目の当たりにして、今までの自分を笑いたくなる思いだったのだ。いくら研鑽を積んでいると自分で思っけていても、ゼノのような本物達からしてみれば、停滞しているのと変わらなかつただろう。

呼吸、体運び、体捌き、念の技術。どれもこれもゼノのそれは高次元で己の未熟さを突き付けられる思いだった。

だが、同時に超一流の者が相手でも全く歯が立たないわけでもない事も分かり、それが小さいが新たな自信となった。小さかろうが、それを核に力をつけていけばいいのだ。

マシロは、基礎と並行してゼノにも通用した“流”を洗練させることにしていた。

攻防力のスムーズな移動は、念の戦闘において必須のスキルだが、それを超高速化させれば、攻撃にも防御にも常に攻防力100、すなわち“硬”を用いて戦い続けられるのではないかと考えたからだ。これが可能になれば、理論上はどんな格上が相手でも正面戦闘では勝つことが出来る。

そのために必要となるのは、反射が如きオーラの移動速度だ。考えてからでは遅く、思う前に行えるようにならないければならない。

それからのマシロの修行は壮絶だった。

初めはピッチングマシンから射ち出されるボールを硬で防ぐ訓練をしていたが、すぐに四方にピッチングマシンを置くようになり、さらに進んでクロスボウを使うようになっていき、そして遂には実弾の入った銃を使うまでになっていった。

怪我が絶えず、頻繁に重症も負うため常に傍には雇った治癒系の念能力者が必要だった。

その能力者もマシロの狂ったとしか言い様のない修行に気圧されていた。硬とは敵が隙を晒した時に止めとして使うものというのがその能力者の認識だった。それを常に使い続けようとするマシロはどうかしていた。もしミスをすればその代償は己の命なのだ。その能力者にしてみればマシロのそれは狂人の発想だった。

そして徐々に形に成り始めた修行。マシロは実践を求めて街へと出て行く。

ヤクザくずれのチンピラを相手に殺さない程度に抑えた僅かなオーラを顕在化して、それをもって実戦にのぞむ。一人二人は問題にならずも人数が増えていくに従い対応に手間取り大怪我を負うこともあった。

マシロがこの実践で求めたのは、死を相手取って躍り続けられるだけの精神力。流を極めた究極の戦闘術には必須となるものだ。

どんどん力をつけていくマシロが念を覚えている犯罪者を相手にするようになるまでそう時間はかからなかった。

この間、マシロはハンター試験にも合格した。

ボディガードとしても力をつけるために、ライセンスの優遇措置を使って各国の護衛官養成訓練プログラムを受けるためだ。

長年の蓄積によって網羅され体系化された知識と技術と経験則はマシロの成長の肥やしとなり、マシロを高める土台となる。

ゼノとの闘いから3年。顔から幼さも消え、精悍な青年となったマシロは、この頃になると最早スペシャル・ワンと呼べるだけの力を身につけるようになっていた。

自信と実力を醸成させたマシロは、ボディガード業を再開させる。

今度登録した仲介業者は以前よりもグレードの高い所であったが、ハンター証ライセンスのおかげで無審査での登録となった。

再開一発目の依頼はしかし仲介業者ではなく、3年前ゼノから護った大手証券会社社長ランバートからの紹介だった。

依頼主はマフィアの組長、依頼内容は娘の護衛。

マシロの方針として、「悪人の護衛はしない」というものがあり、初めは断ろうとしたが、先方が必死に食い下がり、前任者が殺されたとの緊急性から短期間、娘の護衛に限ったのみ引き受ける事となった。

依頼主のライトⅡノストラードとはリンゴン空港で合流することとなった。その後、ホテルビーチタクルで娘とその護衛達に引き合わされる。

無垢で世間知らず。それがネオンという少女に抱いた最初の印象。

マフィアの一人娘という肩書きから想像するような悪童ではなく、守ることに苦痛を感じない人物でマシロは安堵する。

「護衛の人を新しく雇ったことは、カジノ行ったり、ショッピングしたり自由に遊んでもいいってことだよね、パパ？」

「いや、ダメだ。オークションを襲う様な悪い奴等からネオンを守るためにマシロくんを雇ったんだ。だから、ネオンは屋敷に帰るんだ。いいね？」

一年で最も賑やかな時期のヨークシンに背を向けて帰らされることにネオンは不満

そうだったが、ライトⅡノストラードがネオンの欲しがっていた競売品を盗賊から取り戻すと約束すると渋々引き下がった。

「いい子だ。それじゃ、部屋に戻って支度をしなさい」

「……はい」

ネオンが部屋に戻ったのを確認したライトⅡノストラードは護衛達に向き直る。

「ネオンには中止と言ったが、オークションは今夜から再開される。場所も時間も同じだ。旅団に盗まれた品も必ず取り戻すと十老頭は言っている」

「盗まれた？」

クラピカが疑問を挟む。捕らえていた旅団所属の大男ウボオーギンの話では、競売品は陰獣の一人に先を越され、旅団は何も盗ってないとの話だったからだ。

「陰獣は全員旅団にやられたらしい」

陰獣の全滅をライトⅡノストラードは告げる。

運搬役の梟と呼ばれる陰獣の一人も拐われていることから、競売品は旅団の手に渡ったと十老頭はみているとのことだった。

「陰獣が……死んだ」

ポツリとマシロが呟く。

その後、ライトⅡノストラードがいくつか指示を出し、場は解散となった。



「少しいいだろうか？」

護衛チームの新リーダーと紹介されたクラピカという青年がマシロに話しかける。

「指揮系統をはつきりさせておきたい。君は組長ボスが試験無しに直接雇った特殊な立場だが、私の指揮下と認識して問題ないだろうか？」

「ええ、問題ありません。短期の契約ですが、俺もこのチームの一員のつもりですから」「そうか。早速で悪いが君の力が知りたい。君は何が出来る？」

護衛員の適性に合わせた護衛計画の立案のためにマシロの実力を把握しようとするクラピカ。マシロは天狐ガーディウス・ウオルの産衣を発動してみせる。

現れる青みがかった透明な壁。

「ご覧の通り念で作った壁です。ライフルの弾も防ぎますし、強化系の念能力者の攻撃もそこそこ耐えられますよ。試してみますか？」

「面白そうじゃねーか。オレにやらせてみるよ」

自信あり気なマシロに、素肌にベストといった出で立ちの毛深い男が腕を回しながら近づいて来る。先程紹介されたバシヨウという男だ。

「ビーズ」

マシロが場を空けると、バシヨウは「よしっ」と気合いを入れ右ストレートを放つ。念能力者だけあってちよつとした事故のような衝撃だったが、壁には微塵も傷はみられない

い。

「く……っ、やるじゃねーか。なら………」

オーラを練るバシヨウ。そして、練り上げたオーラを右手に集め、叩きつける。先程の比ではない威力の右ストレート。轟音。しかし、それでも壁は変わらずそこにあった。

「ほう」とクラピカは感嘆する。

「ちっ、オレの負けだ」

バシヨウはドカツとソフアーに身を預ける。

「よかった。これで壁を壊されたら、格好がつかないところでしたよ」

たははと笑うマシロ。顔合わせの時の緊張感はほどけ、場が弛緩する。護衛チームの5人はマシロを受け入れはじめていた。

「周辺を確認してきます」と言つて部屋を出ていくマシロを見送るクラピカにセンチツが近づいて来る。

「良かったわね。彼、信用できそうな人物で」

「ああ」

組長ホネスから臨時に人を雇ったと知らされたときは、チームの不協和音の種になるのでは

との危惧もあつたが取り越し苦勞だつた。

ノストラードフアミリー組が旅団に狙われるかもしれない今の状況で人柄と実力を信頼できる追加の人材は貴重と言えた。

そして緋仲間の眼の眼を取り戻すために、まず組長ボスに取り入ると言うクラピカの目的からいつでもマシロは有用な人物だつた。ネオンの護衛をマシロに任せて自分はある程度手を空けることが出来るからだ。

これから向かう十老頭が招集した旅団抹殺のための殺し屋チームへ参加している間もマシロがいれば問題無いと思えた。自分が垣間見た実力と噂に聞く実績からいっても、もし旅団と遭遇するようなことがあつたとしてもネオンを守ることは出来るだろう。

クラピカは出掛ける準備に取り掛かつた。

## No. 003 クロロ×セメタリービル

ネオンは父親への憤懣でいっぱいだった。

ネオンがどれだけオークションへ行きたいか知ってる筈なのに、そのために仕事の占いも譲歩していつもより多い数をこなしてきたのに、オークションは中止になったなんて嘘をついて家へ帰そうとしてきたのだ。

父親が約束だなんて言い出すときは決まって嘘をつくときだとネオンは知っていた。今回もそう。父親の勝手な都合で自分を遠ざけようとしているに違いなかった。

表面上は父親に従って帰り支度はしたが、このまま大人しく帰るつもりは更々無かった。

父親の命令を受けている護衛達の目を欺くために、ショッピングを楽しんでいるふりをして油断させ、まんまと逃げ出すことに成功した。

ネオンは大手を振って歩いて行く。空港の出口でタクシーを捕まえてヨークシンに戻るつもりだった。

ネオンの後を追うマシロ。少し離れた所で全体の監視をしていたマシロは、ネオンが

トイレで変装をして一般の女性客に紛れて逃げ出そうとしていることにも気づいていない。

ネオンが乗り込んだ後に続いて自分も同じタクシーに乗り込む。

「あっ！ マシロさん、どうして!？」

「お供しますよ、ネオンさん」

「え……いいの？ パパの言いつけを破ってるんだよ」

オークション会場に行くことを咎められず、訝しむネオン。

「どうしてもオークションに行きたいんですね？ なら、俺もついていきますよ。」

「護衛はいた方がいいでしょう」

「ありがとう！ ふふ、マシロさんって今までの護衛の人達と違って話がわかるのね！」

無論、マシロはこのまま幻影旅団が襲う可能性の高いオークション会場まで行かせるつもりは無かった。

会場へ入るには参加証が必要なのだが当然ネオンは持つておらず、そこまで行けば諦めもつくだろうという思惑があった。

我が儘なお嬢様の意思も出来るだけ汲もうとマシロは考えていた。でなければ、今回のように暴発される恐れがあり、護衛対象のそういつた考え無しの行動力が護衛する側

からすれば一番困ることだからだ。

マシロの思っていた通り、ネオンを乗せたタクシーはオークション会場手前の検問所で止められることとなる。

ネオンは1年前から楽しみにしていたオークションをなかなか諦めきれず、タクシーを降りてどうにか父親の力を借りずに入る方法はないかと頭を悩ませているがそろそろ潮時だ。

「残念ですが戻りましょう、ネオンさん。街に溢れるオークションの空気は感じられませんが、今から今回はそれで我慢して、また来年来ましょう」

「え〜〜〜！　〜〜〜まできたのにイ……」

口ではまだまだ諦めがつかないネオンだったが、その様子は先刻までと違って弱々しいものになっていく。

タクシーの中で、ネオンに隠れてバシヨウにメールをしてあり、もう暫くすれば迎えの車が到着する筈だった。

キツ。二人の近くに黒塗りの乗用車が停車する。

後部座席の窓が開き、額に包帯を巻いた若い男が顔を出す。

「何か困り事ですか？」

瞬間、マシロの警戒度が一気に上がる。

男が纏うオーラが並みではなかったからだ。そして何よりその眼。暗くて吸い込まれるような底の無い色を宿していた。

「オークションに行きたいのに、検問を通るには参加証がいるんだって……」

「なら一緒に行きますか？」

「え、ホント!!? やったー! ありがとう!」

警戒も何も無いネオンは無邪気に車に乗ってしまふ。

仕方なくマシロも前の座席のドアを開けて乗り込む。

「良かったー。検問通れなくて困ってたの。ホントにありがとう」

「どういたしまして」

一見好青年風な若いこの男、何か裏があつて近づいてきたのではないかとマシロは勘繰っていた。

強力な念能力者が、たまたま困っていたマフィアの娘で凄腕の占い師の前をたまたま通りかかつて助けてくれたとは、護衛する身としては素直に受けとる事はできない。

何があつてもすぐに対応出来るように気構える。

一方の好青年を演じているクロロもそんなマシロの警戒には当然気付いていた。

予知に等しい占いをするというネオンに近づき、それが念能力ならば自分のコレク

シヨンに加えようと考えていたが、邪魔な番犬も一緒についてきてきてしまったものかと思案する。ベストは、和やかに会話をしながら盗みの手順を踏んでいくことなのだが、優秀な番犬がいてはそれも儘ならないだろう。

そのため、今は顔繋ぎだけに留めておく事にした。  
急がなくなるとも機会は直ぐにある。

マシロ達を乗せた乗用車はセメタリービルの地下駐車場で停車する。

車を降りたネオンは上機嫌といった足取りでビルの中へと入っていく。それに続くマシロとクロロ。途中クロロにカフェでの休憩を提案されるがマシロはそれを断り、クロロと別れる。

係の者にゲストルームに案内してもらい、ネオンには競売のカタログを与えて休憩する。

ここにいることをクラピカには知らせたが、ライトノストラードの怒りを買うことは明らかであり、マシロは憂鬱だった。

そして案の定、乱暴にドアを開けて部屋に入ってきたライトノストラードはマシロを怒鳴りつける。

「何をやってるんだお前はッ!! ネオンを守るのがお前の仕事だろうが! それを危険



だと分かっていている所へのこのこと連れてきやがって!!」

「いや、申し訳ないです。本当は検問所で諦めて貰おうと思ってたんですが、親切な人が  
いますね」

「どこのどいつだ、ソイツは！ 余計なことをしおつて」

自分をここまで連れてきてくれた人への父親のあまりな言い方にネオンは反発する。

「そんな言い方つてないでしょ。クロロさんは親切で連れてきてくれたんだから。それに、元々はパパがオークションは中止だなんて嘘をついたのがいけないんじゃない！」  
「む……いやそれはだな、ネオンの安全を思つて……」

ライトⅡノストラードが言葉に窮したところでクラピカが部屋に入ってくる。その顔には些かの焦燥の色が浮かんでいた。

「今確認したのですが、ハンターサイトにお嬢さんの顔写真が載っていました」

「何、娘の顔写真が!?!」

「お嬢さんをここへ連れてきた人物がそれを知っていたかどうかは分かりませんが、今後お嬢さんに近づく者には今まで以上に注意が必要かと思えます」

クラピカの報告を聞いて考え込むマシロ。

「どうかしたか?」

クラピカが問いかける。

「……そのここへ連れてきてくれた人っていうのは手練れの念能力者でした」

「何!」

「底無しの暗さを持ったあの目、もしネオンさんを狙っていたんだとしたら碌な目的じゃないでしょうね」

その時、遠くから銃声が聞こえてくる。爆発音も響き、ビル周辺が俄に騒がしくなり始めた。

「何だ、何が始まったんだ!?!」

狼狽えるライトノストロード。窓から市街を確認すると、彼方此方から絶え間ない銃撃音が聞こえ、車が炎上する光も見えた。

「何だこれは……」

「……恐らくは蜘蛛の襲撃です。私は暗殺チームの仕事に行きます。マシロ、ここは頼む」

「了解」

マシロの返事を背中に受けて、クラピカは走って部屋を出て行った。

「……………始まったか」

ウボォーへ贈る鎮魂曲<sup>レクイエム</sup>。追想の宴を旅団が催し始める。

クロロは、ひとしきりその音色を鑑賞してから自分への刺客が横たわる部屋を出る。向かう先はネオンⅡノストラードが憩うゲストルーム。

静寂が漂う廊下を歩き、エレベーターに乗る。

護衛がいようと構わなかった。見えない所で始末し、ネオンⅡノストラードを避難と称して連れ出す。その後は当初の予定通りに事を運ぶ。

クロロとしては珍しく暴れたい気分だった。

エレベーターがゲストルームのある5階に止まった。

壁に背を預け目を閉じているマシロの横をうろろとライトⅡノストラードは動き回っている。

「迎えは呼んだのだろうか！　こんなところに居たら命が幾らあっても足りない！」

「今外に出ていく方が危険だと思いますよ。旅団は道なりにマフィアを殲滅しながら来ているようですから、鉢合わせるかもしれない」

迎えに呼んでいたバシヨウ達は検問を通過出来ず、その外側で待機していた。

落ち着きの無い父親とは対照的にネオンはソファーに座って競売のカタログを見ている。流石にいつもの元気は無く、カタログに集中することで不安を押し殺している様だった。

マシロの背筋に寒気が走る。  
部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

## No. 004 クロロ×激突

扉の外に立つクロロに、マシロは一瞬吞まれかけた。

剣呑に光るその目には人としての温かさなど微塵も無い。全身からは触れる者全てに死を運ぶ死神の如き威圧が放たれていた。

「あ、クロロさん。どうかしたの?」

マシロの背後でネオンが声を上げる。クロロの威圧は霧散し、人の良さそうな笑みがその顔に貼り付けられた。

「外の襲撃者がビルに侵入したらしくてね。君のところの護衛くんと一緒にこのフロアの安全を確認したいと思って来たんだ」

「何ッ、賊が侵入しただど!?!」

ライトノストロードが狼狽しているが、マシロは気が回らない。マシロの注意はクロロが胸元に掲げる人差し指に注がれていた。

” 大人しくついてこい。でなければ、ここで事を起こす”  
そうオーラのメッセージが浮かんでいる。

外の襲撃者と同じタイミングで仕掛けてきたということは、この男も幻影旅団の一人

なのだろう。そして問答無用に襲って来ないところをみるに、ネオンの暗殺ではなく、拉致が目的だと思われる。

「この守りにはクラピカを呼び戻して下さい」

「お、おい」とライトノストロードが声をかけるのも構わずマシロは部屋を出る。遠くではまだ銃声と爆発音が鳴っている。

クロロの先導で静かな廊下を歩いていく。階段を降りて着いた先は広い休憩エリア。人っ子一人いない。

歩みを止め振り返るクロロ。

マシロは臨戦体勢に入る。

駆ける。

一息で詰まる間合い。  
いっそく

マシロの飛び回し蹴りをクロロは後ろ回し蹴りで迎え撃つ。

相殺される運動エネルギー。着地。そこは、死が濃密な領域。

拳打、蹴撃の応酬が二人の間で火花の様に咲き乱れる。

クロロのミドルキックがマシロを捉えた。

しつかりとガードしたマシロは飛ぶに任せて距離を取る。いつもならここで銃撃を行って手を休めないのだが、ビルに入る際に武器の類いは全て預けてしまっていたた

め、生憎と今は丸腰だった。

間髪入れずにクロロが駆け寄ってくる。

腰の辺りから繰り出されるその攻撃に嫌なものを感じ取ったマシロは右前腕を“硬  
”で覆う。

甲高い音を立ててナイフの刀身が宙を舞う。

瞠目するクロロ。間合いを開ける。

(毒を塗ったナイフなんだけどな。折れますか)

今の攻防でクロロは接近戦一辺倒は危険かもしれないと思い始めていた。

マシロの“流”は寒気がする程静かで速い。

接近戦を続けていると、念での防御が徐々に間に合わなくなっていくって致命的な隙を  
晒すことになりかねない。

(……仕方無い)

クロロの右手に本が現れた。マシロは警戒を強める。

どんな能力が秘められているか未知数だが、それを相手のペースの中で使わせないた  
めに先手を取るべく走り出す。

念弾を放って牽制。銃があれば銃自身の威力に念を纏わせることで、オーラの消費を和らげつつ速度と威力を高めた攻撃が出来る。やはり、銃が無いのは痛かった。

と、進路上に急にテーブルが現れる。

「ッ!？」

避けきれずにぶつかってしまいが、その勢いそのまま前転することで体勢を立て直す。クロロを見やるが姿が無い。

背後に気配を感じ、慌てて身を伏せる。

唸り上げた蹴りが上空を通過していく。

振り向き様に足払いを仕掛けるが手応えは無く、クロロも居ない。

頭上に天狐の産衣で壁を作る。ガレイウス・ウオール直後に響き渡る衝撃音。

クロロの踵落としを壁が阻んでいた。

マシロは壁を消して”硬”を込めた拳で殴りかかるが、またも姿がかき消える。

そして、離れた場所にクロロが現れる。

「……瞬間移動ですか」

厄介だなと考えるマシロ。恐らくは物と人を移動させる能力。安心材料は敵には強制出来なさそうなことか。

だが、どうにも解せなかった。瞬間移動の能力なのに何故本を持っているのか。制約



? それにしても本と能力の間に関連性が見えない。

「そういうあんたは念の壁を作る能力か。汎用性の高そうない能力だ」

クロ口の問いには答ええない。言質を与えないためだ。こちらが肯定しなければ、相手の答えは仮定のままだ。

仕切り直す。

確かに全ての距離が相手の間合いというのは厄介だがどうにもならない訳でもない。壁を幾つも生み出して自分を守りつつ、相手の動きを制限していけばいいのだ。

じり、じりつと互いに仕掛ける契機を探り合う。

「なかなかレベルの高い戦いをしておるの」

通路の奥から2つの人影が現れる。

1人は「生涯現役」と書かれた布を身に着けた老年の男。もう1人は猫科の肉食獣を思わせる壮年の男だ。

「ゼノ……さん」

「しばらく見ぬうちに見違えたのオ。オーラの質が段違いじゃ」

「知り合いか? 親父」

「前に話したことがあったじゃろ。仕事で面白そうな若造に出会したと」

「ああ、こいつがマシロ嬢シロギヌか。……………成る程」

マシロに値踏みするような視線を向けた壮年の男は納得気に頷く。ゼノを親父と呼んでいることから、この男がゾルディック家の現当主シルバルゾルディックなのだろう。

「どれ、お主は下がっておれ。あやつはワシらの標的じゃ」

そう言つてゼノとシルバが歩み出る。

「ふう」と腰に手をやりながらマシロは大人しく下がる。別に敵を横取りされることに異存はなかった。

「逃げんの？」

クロロが挑発してくるがマシロは取り合わない。

「別にあなたと決着をつけることが俺の仕事じゃありませんからね。ここはゾルディック家の方々に譲りますよ」

マシロが加われればゼノとシルバの連携の邪魔をすることになる。或いは、マシロが一對一の決着に躍起になることをクロロは望んだのかもしれないが取り合う義理は無い。

「それじゃ、後はお二人に任せます」

そう言つてマシロは、ノストロード父娘が待つゲストルームに戻る。

背後から戦闘音が聞こえ始めた。

窓から街を見下ろす。銃声も散発的になってきており、事態が終息に向かっている事を物語っていた。

同胞の仇が手を伸ばせば届く距離にも関わらず、戦うことが許されない状況にクラピカは苛立ちを隠せなかった。

組長<sup>ボス</sup>の護衛のためにここを離れる訳にはいかず、フロアの安全を確認しに出たというマシロもまだ戻って来ない。

「大分静かになってきたな」

ライトⅡノストラードも落ち着きを取り戻したようで、ソファーに身を沈めて息を吐いている。

扉が開く音がして、マシロが部屋に入ってきた。

袖の部分が切り裂かれていたりと服に乱れがあり、何かがあったことは一目瞭然だった。

「何があった?」

マシロは冷蔵庫を開けてペットボトルの水を取り出す。

「いやー参りましたよ。襲撃者がビルに侵入したというから行ってみたら、そう言った人自身が襲撃者なんですから。あの人も旅団の一員なんでしょうね」

旅団という言葉にクラピカは余裕を無くす。

「撃退したのか!？」

「いえ、ゾルディックの二人が来たので途中で代わってきました」

居ても立ってもいられず、駆け出そうとしたところで爆発音が響きビルが揺れる。

「な、なんだ今の爆発はッ!？」

ライトノストロードが喚いている横を抜けてクラピカは部屋を出る。

もしかしたら今の爆発で蜘蛛とゾルディックの戦いに決着がついてしまったのかもしれない。焦燥に駆られながらクラピカは必死に爆発の場所を探す。

しばらくしてマフィアン・コミュニティの警備員達が何かを囲むように集まっているのを見つける。

「何があった?」

警備員の一人に話しかけると、その男は何かを指し示す。

「ああ、あれを見ろよ。ゾルディックがやったらしいぜ」

「さすがだな」という警備員の言葉はクラピカの耳には届かなかった。指し示された先にあつたのは、服がボロボロの左腕が欠損した若い男の死体。

目を見開いたまま事切れている。

クラピカは膝の力が抜けるような脱力感に襲われた。自分が真っ直ぐ立っているの

かどうかも分からない。

長年追い求めて止まなかった仇が、自分の手に抛らずに呆気なく息絶えていた。その後も警備員の無線を通して旅団の残党が死んだとの報告が続々と入ってくる。目の前の道が急に無くなったかのような喪失感にクラピカは包まれていた。

## No. 005 ノブナガ×路上

翌日。9月4日。

朝のミーティングで今日の予定の確認と午後からのネオンの買い物についていく護衛の当番が決められた。

世間は仕事や学校に行き出す時間だが、当のネオンは奥の部屋でぐっすり夢の中だった。

護衛チームのメンバーは皆が思い思いにソファ<sup>みな</sup>に座って本を読んだり、お茶の用意をしている侍女を手伝ったりしている。

そんな中でクラピカは物憂げな表情を浮かべながら部屋を出ていった。

「何か用事ですかね？」

「お友だちのところに行つたのよ。ヨークシンに来てるらしいわ」

セリツの持ってきたコーヒーをマシロは礼を言つて受け取る。

「そうですか。なら、少しは気が晴れますかね」

「あなたも心配してくれるのね」

「そりゃあ命を預け合う仲なんですから、ただの知り合い以上の関係性でしょ。俺達は」

昨夜は幻影旅団の襲撃があつたもののオークションは予定通り行われた。

オークションを楽しみにしていたネオンは終始ハイテンションで、お目当ての”緋の眼”以外にも多数落札することとなり、ライトⅡノストラードは娘の楽しそうな姿に笑みを送りつつもどこか顔を引きつらせていた。

クラピカと共に護衛についていたマシロだったが、その時からクラピカの様子がおかしい事に気がついていた。

何か物思いに沈んでいるのかいつもの覇気が無く、心此処に在らずといった様子だったのだ。

個人的な悩みなのだろう、相談もされないためマシロは何も出来なかつたが、友人がいるのなら大丈夫だろうと、マシロは椅子に座つてテレビを見始めた。

発展著しいヨークシン。そんなきらびやかな大都市にも開発から取り残された区画がある。その廃ビルの一つを幻影旅団は拠点にしていた。

「シヤル、ノストラード組の居場所はまだ分からねーのか？」

ノブナガは苛立たしげに声を荒げる。

ウボオーを殺した鎖野郎の正体がいまだに分からず、影さえ掴めない。ノストラード

に最近雇われた事が判明しているが、ウボオーが報復に行った後はそのノストラード  
ファミリ組の居場所すら分からなくなつてしまつていた。

ファミリ「組の所有する建物には居ないし、構成員名義のホテルの宿泊も無し。もし偽名とかで泊まつてるんだとしたらオレ一人じゃ、見つける時間も労力も足りないよ」

「ちっ」

「シャルナーク、オレが頼んだ方はどうだった？」

散乱する瓦礫に腰かけた団長が問いかける。

団員全員がこの場に集まつていた。つい2日前まではこの輪の中にウボオーもいたのだが、もうその姿はない。声が大きくて鬱陶しいといつも思つていたのだが、今は灯が消えてしまったような寂しさをノブナガは感じていた。

「マシロシロギヌの事だね。一応ハンターサイトも使つて調べてみたけど、大した情報は無かつたよ」

「それでもいい」

「分かつた。マシロシロギヌ、22才。3年前、依頼人をゾルディックから守りきつたことで一躍名を上げた。その依頼は、ゾルディックが相手だと判明していたから皆敬遠したんだけど、駆け出しで碌な仕事のなかつたマシロシロギヌに回つてきたみたい。その後から現在までの情報は無し。鍛え直してみたいんだけど、大きな仕事といえ



さっきの一つだけだから殆んど何も分からないのと一緒だよ」

「これが顔写真だよ」とプリントアウトした紙をシャルナークは皆に見せる。

ノブナガも聞いたことのある名前だった。噂話で聞いた程度で気にも留めていなかったが、昨日団長とやり合って団長の目論見を潰したらしい。

「そんな団長が気にする程の奴なのかよ」

フィックスが疑問の声を上げる。

「ああ。この先鎖野郎を追うのならぶつかる可能性もある」

「よっしゃ。追っていいんだな団長。鎖野郎を」

ノブナガは歓喜する。もしかしたら、今夜の競売品を盗ったらホームに帰還することになるのではないかと心配していたからだ。だがそれも杞憂に終わった。

蜘蛛のために情より利を優先させる団長にしてもウボオーの死はよっぽどの事らしい。ウボオーとは蜘蛛の結成以前からの付き合いだ。ノブナガとしてもその怒りは並大抵ではない。

「喜んでるとこ悪いけど、結局どうやって鎖野郎を見つけるかが解決してないよ」

「だあー！ うるせーぞ、マチ！ それを今考えてんだらうが」

「全員で今分かっていることを確認しておこう」

団長を中心に情報を整理していく。

ノストラード ファミリ組のボスの娘に付いているボディガードの話をして、シズクとパクノダの何気無い会話を聞いた団長が急に黙りこむ。

何かを閃いたようだった。そしてこういう時の団長の閃きは、ほとんど正解に辿り着いていることをノブナガは経験から知っていた。

標的が定まった蜘蛛は動き出す。

「マジかよ!! 部屋をかえたのがバレたのか!」

クラピカからの電話はホテルで留守番をしていたスクワラを動転させた。

旅団の襲来。奴等はホテルベーチタクルの方向を目指して移動しているらしかった。

ワガママ娘の買い物に付き合わずに済んでホッと一息ついているところだったが、取るものも取らずに慌ててスクワラは逃げ出す。……緋の眼だけは持つて。

逃げ出すにしても雇われている身だ。雇い主の娘が大切にしている物まで捨てて、逃げ出す訳にはいかなかった。

エレベーターに乗って地下の駐車場に向かう。

車を飛ばす。一刻でも早く、一寸でも遠くへ。

旅団の一人が陰獣と戦う場面を目撃していたスクワラは、自分では旅団の人間に到底

太刀打ち出来ないと身に染みて感じていた。追い付かれれば、自分は狼を前にした子羊のように慈悲を願いながら死を待つしかないだろう。

「くそッ、こんな時に渋滞かよ!!」

時刻は夕方。この時間帯はラッシュユのために街の中心部にかけて大渋滞することは有名だった。

遅々とした車の流れにスクワラの焦りは大きくなっていく。まだ大してホテルから離れられていない。今に旅団が現れやしないかと気が気ではなかった。

こんな時に頭に浮かぶのはエリザのことだ。

ネオンの侍女をしている彼女とは今の仕事に就いた時に知り合ったが、今では将来を約束する仲になっていた。結婚に踏み切れないでいるのは、自分の仕事が危険と隣り合わせで不安定だということもあるが、それ以上に家庭を持つということにいまいち実感が湧かず、尻込みしてしまっているためだった。愛しい人と相棒と呼べる犬達を果たして自分は守っていくことが出来るのか。

しかし、そんな悩みも今に至っては馬鹿らしいことだった。死んだら元も子もない。幸せに手を掛けながらなにを悩んでいるのか。

この窮地を脱したら、直ぐ様仕事を辞めてエリザにプロポーズすることをスクワラは決めた。

「……グルルル」

車に乗せている犬達の一匹が何か気に気づいたらしく唸り始めた。

「どうしたッ」

後方を確認するため振り向くと一瞬過る影。なにかが車の屋根に乗った衝撃と共に刃が天井から突き出された。

「止まれ」

底冷えのする声。震えながら車を停車させる。

刀の刀身には、蒼白になったスクワラの顔が映っている。

「降りろ」

天井に乗っていた着流しの男が前方に降り立って言う。

左には銃を構えたスーツの女。右後方には髪の毛の長い小男。逃げ場は無い。

スクワラは死を悟った。

せめて犬達だけは逃がそうと車を降りながら口笛で指示を出す。

後方へ走っていく犬達。

旅団の三人は犬を害する気は無いようでスクワラは一安心した。

スーツの女に後ろ手に手を取られる。

「あんたの仲間に鎖を使う奴がいるでしょう？ 今どこ？」

「なんの話だ!? オレをノストラードファミリ組の者だとわかつ……がッ!」

右腕を折られる。あまりの激痛に全身からぶわつと冷たい汗が出てきた。

だが、それでもスクワラには仲間を売る気は毛頭無かった。長年鉄火場を生きてきたプロとしての矜持が許さない。

その結果、例え死ぬことになろうとも。

突然スーツの女が吹き飛ぶ。その余波でスクワラも尻餅をついた。

霞む目で見上げるとマシロが立っていた。

20分前。

マシロはバシヨウと共に買い物をするネオンの護衛についていた。そこにクラピカからの電話が入ってきた。

「クラピカからか? 何だつて?」

バシヨウが電話の用件を聞いてくる。

「幻影旅団がホテル方面にまとまって移動し始めたから、ホテルには戻らないようにとのことです」

「何! 奴等オレ達を探してるのか?」

「幻影旅団って競売品を盗んだっていう人たちのことでしょ？ えー！ なんてホテルに来るのよオ」

「買った物に夢中になっていていると思っていたが、ネオンは今の話を聞いていたらしい。」

「あ！ 緋の眼！ もしかしてアレ盗りに来たんじゃない？」

「昨日で旅団は半壊した筈だ。それが翌日にはもう、競売品だった品を奪いに動くだろうか。それとも、まだネオンを狙っているのか。」

「アレ気入ってるのにく。……ねえ、どつちか緋の眼を取りに行つてきてよ。ね？ お願ひ」

「それより、すぐに此処を離れましょう。無いとは思いますが、旅団がここまで来るかもしれない」

「やだよ。緋の眼を持ってきてくれるまで動かないよ」

「頑ななネオンにマシロはため息をつく。隣のバシヨウを見るとこめかみに青筋を浮かばせている。」

「……分かりました。俺が取りに戻ります。ですから、ネオンさんはバシヨウ達と一緒に此処を離れてください」

「はい」

走りながらホテルとスクワラの携帯に電話をかけるが、どちらにも出ない。クラピカ

からの連絡が行ってホテルは出たが携帯は忘れたのだろうか。

デパートから出ると、昼頃から降り出した雨はまだ降り続いていった。

宵口のラッシュの時刻。車道も歩道も車と人で溢れ返っている。

「仕方無いか」

マシロは空中に飛び石のように壁を作り出し、その上を走って移動し始める。人々は傘をさしていることもあつてか、それに気づく人間は多くない。

ホテルの方向に向かって走っていると、車道を走る犬の集団を見つける。スクワラの犬達だ。

車道に降りる。犬達は一瞬身を強張らせたが、マシロだと気づき警戒を解く。

「スクワラはどうした？」

マシロが問いかけると、一番後ろを走っていたセントバーナードが「ワン」と一鳴きして来た道に戻り始めた。マシロはそれについていく。

少して、強化した視力で前方の人影を捉える。

「キミ達はここにいて」

マシロは犬達にそう言って、また壁を作って空中を走り出す。

敵の視界に入らないように大回りしながら近づいて行く。

スーツを来た金髪の女がスクワラの腕を折った。それを見たマシロは走る速度を上

げ、高速で接近していく。

横合いからの急襲。女は反応出来ずに、まともにマシロの膝蹴りを顎にくらって吹き飛ぶ。

同時にマシロに気づいた鬚を結った男の斬撃を身体を捻りながら壁を作っていない。いなしながら、近づいて来ようとしている小男に銃撃を見舞う。

着地したマシロは直ぐ様スクワラを抱えて距離をあけた。

「ま……マシロ」

「俺の後ろから動かないで下さいね、スクワラ」

そう言つてマシロは、スクワラを囲む様に”

ガーディウス・ウオール  
天狐の産衣

を発動させる。即席の

シエルターだ。

「パクノダはどうだ、コルトピ？」

鬚の男は刀身を鞘に戻した刀の柄に手をかけながら、マシロを睨んでいる。

「駄目。完全に気絶してる。暫く起きそうにないよ」

「ちつ、仕方ねー。お前はパクノダ連れて団長の所に戻れ」

「わかった」

コルトピと呼ばれた小男は金髪の女を抱えて引いて行く。



「さてと、誰だてめエ……と言いたかったが、その面。てめエがマシロシロギヌか」  
「そういうあなたは幻影旅団。……引いてくれるならこちらも追いませんが？」

鬍の男は鼻で笑う。

「はっ、誰が引くかよ。仲間やられてむぎむぎ引ける訳がねエ。……お前に聞きたいこともある」

鬍の男の目が据わる。一戦交えるのを回避することは出来そうにない雰囲気だ。

鬍の男は腰を落として半身になる。居合い特有の構えだ。

「てめエの仲間に鎖を使う奴はいるか？」

クラピカの顔が浮かんだが、それを素直に教える訳が無い。

「鎖？知りませんけど」

「そうかい。なら……殺すだけだ！」

鬍の男が地を蹴る。接近してくる男に銃を撃つが完全に見切っているようで、刀すら抜かずに避けられる。

彼我の距離が詰まっていく。

撃つ。片足が相手の”円”に入った。悪寒。銃弾に込めたオーラから壁を生み出す。鬍の男の刃が壁を断ちながら進む。マシロはなりふり構わず地面に転がって避けた。

「しっふふふ」

マシロは銃弾に込めたオーラで自分から離れた所に壁を生み出して、それに相手がつかつた隙を突こうとしていた。その攻撃がたまたま相手の攻撃と同時だったために意図せず壁が緩衝材となり、居合いを避けることが出来ていた。

そうでなければ完全に斬られていただろう。それだけの疾さと必殺の意思が刀に籠っていた。

一筋縄ではいかない相手に冷や汗をかく。さすがはA級賞金首だ。立て直す。

とにかく相手の初太刀を避けて刀を抜かせる事は出来た。居合いが無いうちに攻めにかかる。壁を作る時にはいつも以上にオーラを込めることにした。

「ちっ、やるじゃねーかよ。団長が手こずるわけだ」

マシロは腰からナイフを抜いて切りかかる。相手の間合いの方が長いが、壁を盾に使って強引に相手の懐に入る。

ナイフを突き出す。

鬚の男は回転して避ける。そしてその勢いそのままマシロの首を断とうと斬り上げる。

マシロはそれを“硬”で受け止める。

「!!？」

驚愕する鬚の男。マシロはその場で身を捻りながら跳び上がる。

右手を狙って刀を蹴り飛ばす。泳ぐ相手の身体。

着地と同時に回し蹴り。”硬”を纏ったそれは鬍の男の右肩を完璧に破壊した。

「ぐわアアッ……!!!」

鬍の男は肩を押さえてうづくまる。

マシロは悠然と立ってそれを見下ろす。

「さあ、さっさと消えろ」

強い語調で告げるマシロを血走った目で睨み付けながら鬍の男は撤退して行った。

スクワラのところへ戻ったマシロは、彼を囲んでいた壁を消す。

「……お前、すげーな」

スクワラはマシロに驚嘆の眼差しを向ける。

何しろあの幻影旅団の三人を一人は気絶させ、もう一人には深手を負わせて撤退に追

い込んだのだ。ただただ凄いとしか言いようがない。

「礼を言うぜ。助かった」

「お礼ならあなたの犬達にも言っておいてください。あなたの元まで俺を案内してくれ

たんですよ」

遠くから犬達が駆け寄ってくる。誰も彼もが尻尾を大きく振って、主人の生還を喜ん

でいた。

「そうか」

スクワラの横顔は嬉しげだった。

## No. 006 旅団×ホテルベーチタクル

クロロ一行はホテルベーチタクルに到着する。

途中思いがけず捕虜を取ることとなったが、マチの勘によればこの子供二人は鎖野郎とどこかで繋がっている。それが正しければ鎖野郎への手札の一つとなるだろう。

クロロは捕虜への人手のためにフィinks達を呼び出す。後は緋の眼を追ったパクノダ達が何か情報を持って帰ってくるのを待つだけだった。

順調に鎖野郎に迫っている。焦りも不安も無い。獲物の影が見え始めた事への逸りも無い。

正面玄関近くの柱の前で待機していると、自動ドアが開きコルトピが入ってきた。意識の無いパクノダを横抱きにしている。

「何があつた？」

「マシロシロギヌ。アイツにやられた」

パクノダを柱にもたれ掛からせながらコルトピが経緯を説明する。そばにしゃがんだシズクが介抱をし始めた。

それを横に見ながらクロロはコルトピを確認する。

「緋の眼を持って移動していたのがマシロシロギヌだったのか？」

「ううん。スクワラって男。尋問しているところを襲われたんだ。今はノブナガがやり合ってる。情報はパクノダがちやんと取ったと思うけど……」

パクノダがこれでは肝心の情報は引き出せない。子供から隠し事を聞き出させようとしていたクロロの予定も狂った。

パクノダが盗った情報次第だが時間を無闇に浪費すると、折角口を絞り始めた網から鎖野郎が逃げてしまうかもしれない。

「……やはり邪魔だな」

クロロの口からポツリと零れる。

ネオンノストラードの件といい、つくづくあのボディガードはこちらの邪魔をし  
てくる。

いまだ予知能力を諦めていないクロロの頭に「排除」の二文字が浮かぶ。

突然辺りを暗闇が包んだ。停電。

肉を打つ鈍い打撃音と共に戦闘の気配がクロロの近くで起こった。

小柄な黒いシルエツトが動いているのが見えたので捕まえる。雨空といつても外は停電のホテル内よりも明るいため、外に面する窓を背景にすれば人のシルエツト位は見分けられた。

もう一人の子供はマチがすっかり捕獲し直したようだったがクロ口はまだ気を抜かない。示し合わせた停電からの反撃。子供の仲間からの襲撃がまだ残っているかもしれない。

稲光がホテル内を照らす。

「！」

パクノダが消えていた。

「団長！パクがッ」

「シズク、コルトピ、追え。恐らく鎖野郎だ」

二人は走って外へ出ていく。

マフィアが懸賞金を取り下げた今、襲ってくるのは旅団に恨みを持つ鎖野郎しかない。

マチの勤の通り子供二人は鎖野郎の仲間だったというわけだ。そして、鎖野郎は仲間の救出よりもパクノダの拉致を優先した。

停電が復旧し明かりが点く。

「ツノブナガー！」

ホテルに入ってきた人物を見てマチが声を上げる。

ノブナガは脂汗を大量に流しながら右肩を押しさえている。足取りもふらついていた。

悪いこととは立て続けに起こるものだ。クロロは自身が良くない流れの中に入っていることを感じ始めていた。

「その女、ホンとに気絶してんのか？」

パクノダの拉致に成功したクラピカは、レオリオの運転する車で急いでホテルビーチタクルから離れていた。

「ああ、大丈夫だ。意識は無い。それよりもレオリオ、急ぎ過ぎてあまり目立つような運転はするなよ」

「分かってるって」

パクノダは手足を鎖で縛り付け、クラピカが着けていた変装用のカツラを被せていた。ジャケットも体に掛けてあり、外から見ただけでは一見するとポニーテールの女が寝ているようにしか見えない。追っ手がかかったとしてもすぐには見破られないだろう。

「どうする、クラピカ。記憶を読むって女は捕えたが、ゴンとキルアはまだ捕まったままだ。状況は五分になったけどぞ」

「分かってる。これから旅団の頭を誘い出す。その時の交渉で二人を助ける」



人質の交換という形で救出するしか方法は無いだろう。

ようやく自分の手に落ちた仇敵の一人。感情のままに殺してしまいたいという想いと仲間をその代償にすることは出来ないという想い。二つの想いがせめぎ合い、クラピカの拳は固く握り締められていた。

「……センチツ、マシロに電話してみてくれないか」

ホテルの後からやって来た旅団<sup>クモ</sup>の話ではマシロと交戦したとのことだったが、もし無事なら自分を助けてくれるかもしれない。クラピカはマシロが事態を劇的に変えてくれるのではないかと僅かながら期待をかけていた。

本当なら幻影旅団を自分だけの敵として一人で決着を付けたかったが、自分の激情に駆られた暴走のせいで仲間を危険に晒す失態をしてしまった今となっては、そんな自分一人のプライドに固執しているわけにはいかない。

センチツは携帯を取り出して電話をかけ始める。

「マシロってお前の仕事仲間だったよな？ 大丈夫かよ。旅団の相手が務まるのか？」  
「彼は私が念を覚えてから出会った者の中で別格の力を持っていた。恐らく私の身近で唯一旅団<sup>クモ</sup>と対峙出来る使い手だ」

「マジかよ!! だったら始めっから協力してもらえよな!」

レオリオの声が雨中の車内に響く。どんよりとした夜の雨空に差し込むような明る

さがそこにはあった。

待ち合いスペースのソファアに腰掛けるクロロを中心に旅団員達は固まっていた。フィinks達も合流し、クロロを囲んでいる。

ノブナガが負傷し、パクノダが拉致されたとあつて皆一様にピリついていた。

「ノブナガは医者に行つてこい。シャルは腕のいい闇医者を探してやれ」

「分かった。ついでに医者まで付き添つてくるよ」

「いや、お前にはやってもらうことがある。残つてくれ」

その具体的な内容をクロロは言わなかったが、シャルナークは納得しパソコンを借りてホテルの受け付けに向かう。その目に憤怒の炎を宿しながらも己の不甲斐なさの下を向いているノブナガもその後を黙つてついていく。

「団長！ オレもパクノダを探しに行つてくる。まだそんな遠くに行つてねー筈だ」

息巻くフィinksをクロロは押し留める。

「まあ待て。パクノダを拐われたが、こつちにも人質はある。コイツらが鎖野郎に仲間だと思われているのなら、何かしら連絡が来る」

「ただの捨て石だったら？」

フエイタンが疑問を挟む。

「その場合でも連絡はくるさ。せつかく旅団の一人を捕まえたんだ、パクノダを餌にオレ達を絞首台に登らせる算段をつけたいだろうからな……」

クロロは一度そこで言葉を切ってフィックスとフエイタンが拘束している子供二人に目をやる。

「もつとも、その時にはこの子供達には捨て石に相応しい末路が待っているが」

クロロを見てゴンとキルアは身を強張らせる。クロロの目から自分達二人の命に毛程も価値を見出だしていないことが読み取れたからだ。

携帯の着信音が鳴る。

クロロの携帯に電話がかかってきた。

「……パクノダからだ」

着信画面を確認したクロロの一言に場が張り詰める。

「鎖野郎か？」

『これから3つ指示する。大原則としてこちらの指示は絶対だ。従わなければ即座にパクノダという女を殺す』

前置きも何も無く電話の人物が命令を出してくる。中性的で落ち着いた声色だが、冷たさも感じさせる。電話の主が鎖野郎なら理知的な若い男だということだ。

『1つ、追跡はするな。2つ、人質の二人に危害を加えるな。3つ、<sup>リーダー</sup>団長に代われ』  
「オレがそうだ」

『そうか。ならば、この瞬間から仲間との一切のコミュニケーションを禁止する。これから指定する場所にお前一人で来い。一つ教えておくが、こちらには嘘を見破る能力者がいる。小細工はしてもいいが、それがお前たちの有利になることは無いとだけ言っておく』

ククロの口角が上がる。

こちらの身動きを縛るために嘘を見破る能力者を持ち出したのだろうか、ククロには付け入る隙に見えた。対面しなければ嘘を見破れないならば、その時にはもう策謀は完了しているし、電話越しに見破れるとしてもその方法には見当がつく。

『一度誰かに代われ』

マチに電話を渡す。

奥からシャルナークが戻ってきた。ククロはシャルナークの元へ歩いていく。

仲間とのコミュニケーションの禁止を言い渡されているが、相手からの一方的な約束事など遵守するつもりはさらさら無かった。

「どうかしたの団長?」

「ああ、今鎖野郎から電話が来たところだ」

「え!」と驚くシャルナークに構わずクロロは話を続ける。

「それでだ、シャル。あの銀髪の子供の方にアンテナを刺せ」

シャルナークの顔には疑問が浮かんでいたが了承する。

「団長」

マチが携帯を差し出してきたのでそれを受けとる。

「代わった」

『リンゴーン空港に8時までに来い。一人でだ』

電話が切れる。

「団長、団員全員人質と一緒にアジトにいろつて鎖野郎から指示されたけど、ノブナガはどうする?」

「問題ない。そのままにしておけ。他には何か言っていたか? マチ」

「もう一つの電話に不定期で連絡する。その際一人でも欠けていたらパクを殺すだつて」

「そうか、分かった。とりあえずシズクとコルトピを呼び戻してくれ」

鎖野郎は団員を人質にすればこちらを言いなりに出来ると考えているようだが、とんだ勘違いだった。

確かにパクノダの能力は貴重で替えの利かないモノだが、旅団クモの壊滅を天秤にはかけ

られない。

仲間を切り捨てる覚悟は有るし、パクノダも旅団クモのために死ぬ覚悟を持っている。

鎖野郎は優位どころか対等の立場にすら立っていない。この認識の誤りが決定的にして致命的な鎖野郎のミス。そもそも同じルールで戦っていないことに気づいていないのだ。

クロロはシャルナークを見て頷く。

頷き返したシャルナークは銀髪の子供に近づきながら、アンテナを取り出して刺す。

「キルアッ!」

黒髪の子供が叫ぶがフェイタンが拘束しているため身動き出来ない。

「ツ………いつてエ」

「!!」

シャルナークが目を見開く。アンテナが刺さっているにも関わらず、銀髪の子供は操作されていない。

「……成る程。先客がいたのか」

流石のクロロをしても想定外だったが、こういうこともあるかと気を取り直す。精神病の治療のために暗示をかける程度に弱く患者を操作する能力者もいる。この銀髪の子供もそういう治療を受けているのかもしれない。

「どうしようか団長」

「……もう一人の方に刺せ」

「ツやめろ!!」

拘束しているフィンクスが銀髪の子供の顎を掴みあげる。

「黙ってる、ガキ……」

今度は成功したようで、黒髪の子供は意思の無い人形のように焦点の定まらない目をして立っている。

「それで？ この子を操作してどうするの団長」

「恐らく鎖野郎はこの人質達を使ってオレ達の動向を監視させるつもりだ。それを欺く」

「なるほどね。でも、それには……」

銀髪の子供に視線が集まる。

フィンクスが顎を掴む手の力を強める。

「おい、そういう訳だからテメエはオレ達に話を合わせてろ。さもねーと……」

「……オレ達を殺すって？ 無理だね。そんな事したら、アンタ達の仲間も」 「問題無

い」

「え？」

「そもそもお前達は見当外れなんだ。パクノダとお前達とでは人質としての存在の重さが違う。オレ達にとって個人の命は旅団クモの壊滅を賭ける程重くない」

”生かすべきは個人ではなく旅団クモ”。

旅団結成時に掲げたその理念は今も色褪せることなく生きている。

フィнкスの携帯が鳴る。

シャルナークに銀髪の子供の拘束を任せ、フィнкスが電話に出る。そして直ぐに黒髪の子供と交代した。

「……うん、大丈夫。全員揃ってるよ。うん、リーダーもさつき一人でホテルを出ていった」

銀髪の子供がどうか仲間情報に欺瞞を知らせようと焦っているのとは裏腹に、団員達はうすら笑っていた。

クロ口の一手で、獲物を追い詰めていると思っている猟犬が途端に狩られる立場に変わったのだ。

鎖野郎の強硬な態度もここに至っては滑稽にしか映らない。

フィнкスに電話が戻るがすぐに切れる。あまりに一方的なためにフィнкスは舌打ちをするも、自分の方が優勢なため怒りもそこまでではない。

「では、リンゴーン空港へ向かうとしよう」



クロロを先頭に幻影旅団はホテルを出る。  
稲光が夜空を走る。昼から降り始めた雨はいよいよ強くなっていた。

## No. 007 旅団×ヨークシン上空

ヨークシンのビル群を眼下に見ながら一隻の飛行船が雨の夜空に浮かんでいた。

通路に佇む二人の人間。マシロとパクノダは窓からヨークシンの街並みを眺めていた。

「時間が来るまで部屋で待機しますか？」

「……結構よ」

気を使ったつもりだったが、一瞥もされず、取り付く島も無い様子にマシロは肩を疎める。

パクノダは後ろ手に手錠をかけられていた。念を使える者にとつては脆弱な拘束と言えたが、クラピカによって念と言動の両方を縛られており、通常取るに足らない拘束も甘んじて受けなければならぬ状態だった。

リンゴーン空港がある方向に視線を向ける。

スクワラを病院へ連れていく車中でセンリツからの電話を受けたマシロは、スクワラを病院で降ろしクラピカ達と合流した。そこでクラピカ達が現在陥っている状況と事情を説明され協力を請われたが、まずマシロが考えたのは現在受けている仕事のこと

だった。

果たしてネオンⅡノストラードの安全に利するか。ボディーガードの任を受けている身でそれを恣にするには許されない。

クラピカから、依頼という形で報酬も支払うと言われたがそれは押し留めた。契約期間中に別の仕事を受けることは、マシロの職業倫理から外れることだからだ。

結果的には、マシロはクラピカに協力することにした。敵が幻影旅団ならば、その勢力を削いでおくこともネオンⅡノストラードの安全に繋がると判断したためだ。一度ネオンⅡノストラードは幻影旅団に狙われており、昨夜の旅団の半壊が嘘ならば今一度狙われてもおかしくない。今受けている護衛任務の延長という形でマシロはクラピカへの協力を了承した。

本来は、護衛対象に危急の事態が迫っているわけではない現状、攻めの護衛方法を取る時間ではないが、仕事仲間の誼でマシロは妥協することにした。

なにより、マシロにはクラピカの復讐に身を焦がす激情がよく理解出来た。

一般論として復讐からは何も生まれないというが、その身から溢れ出る洪水のような感情の行き場は必要で、言ってみれば復讐は当事者が前を向いて歩けるようになるための儀式なのだ。復讐は死者のためではなく生きている者のために必要な事だとマシロは考えていた。

ヨークシンの外れの空から点滅する灯りが近づいてくる。それは飛行船の灯火類で、雨の中徐々に大きく見えてくる。

「時間ですね。もう少し辛抱してください。話がまとまれば、あなたも自由になれますから」

「……そもそも、あなたに気絶させられなければ捕まる事もなかったのだけれど」

2隻の飛行船の速度が合わさり、並んで飛び始める。

対面の飛行船から見えるようにパクノダを窓際にしつかりと立たせた。安全を期して、人質の確認方法に相手の手が届かないよう飛行船を分けたのだが、対面の飛行船に乗っているコートの男が後ろ手に本を出したのを見て、マシロは背筋が凍る。

異変はすぐに起こった。

向こうとこちら、両方の飛行船に突然旅団の団員達が姿を現したのだ。

こちら側には男が4人。いずれも並みの使い手達ではない。

「……あー、マジカー」

マシロの口からそんな乾いた感想が零れる。

その間も事態は進む。巨漢の男が両の指を向け、そこから念弾を雨の如く撃ち出してきた。

ボディガードとしての本能か、マシロはパクノダを射線から突き飛ばし、自分は

天狐の産衣を発動し身を守る。しかし、念弾の威力と数に押され粉々になった船壁と共に雨降る夜空に放り出されてしまう。

慌てること無くマシロはサッカーボール大の念弾を2つ放つ。それは気嚢に命中し穴を開けた。

漏れ出るガス。内側からのガス圧によつて穴は少しずつ大きくなつていき、さつきまで乗っていた飛行船の高度は徐々に落ちていく。

マシロは空中に作つた念壁の上を跳び、もう一方の飛行船へと向かつた。

油断したつもりはなかつた。

何が起きてもいいような心構えは出来ていたし、センリツには傍で相手の心音を聴いて貰つていた。それでも、気づけば敵に囲まれていた。

センリツでも異変を見逃す程の早さと自然さで、旅団にとつてこれは、心にさざ波が立つ程のことでもない日常の事なのかとクラピカは戦慄した。相手を嵌めるのも日常なら、相手への害意も日常。

幻影旅団とは人の血で浴し、人の肉で腹を満たす。獣以下の悪魔のような集団だ。

クラピカの憎悪は、ますます昏く激しく、音を立てて燃え上がる。

しかし、その心とは裏腹に闇雲に戦闘状態には移れなかった。転移してきた旅団員の中にゴンとキルアの姿があったためだ。

ゴンは猿轡と共に手を縛られ、キルアは気を失っているようでスパッツを穿いた着物の女に抱えられていた。

「ツキサマ、人質には手を出すなと言った筈だ！」

「そんな約束、守って貰えると本当に思っていたのか？」

団長の男に表情の変化は無かったが、言葉には冷笑の響きがあった。

ここに至ってクラピカは自分の過ちに気が付いた。

自分の秘密を盗み出せるパクノダを最大の脅威と考えていたが、パクノダを拉致したホテルベーチタクルでのあの場面、まず第一に標的にすべきは団長この男だったのだ。

自分の整えた盤面をひっくり返せる頭脳と冷酷さを持った団長この男を排除してこそ、旅団を自分のペースに巻き込めたのだ。

だが、気づいたところで最早遅きに失した。

「命を絶て」

コートのポケットに片手を入れたまま団長リーダーが言う。

「人質を解放して欲しければ、自ら命を絶て」

「ッ!？」

冷然と告げられる宣告。

死ぬことは出来ない。だが、仲間を見捨てることも。

クラピカは、この場を打開する方策を考える。追い詰められた頭で必死に考えるが何も見えない。

戦うか？ 否だ。自分と支援を主とするセンチツの2人では、人質が害されるより先に4人のA級首から奪還することは難しい。

撤退？ 否だ。自分は助かって、ゴンとキルアは恐らく殺される。

時間を稼ぐ？ 否だ。先の展望が無いのに時間稼ぎをしたところで状況は変わらない。

「どうした？ あまり待たせるな」

追い詰められるクラピカ。前にも後ろにも道が無い。

八方塞がりだった。

その時、何かが飛行船の窓を突き破って入ってきた。

マシロだ。

どうやったかは分からないが、マシロは向かいの飛行船から難敵を退けてこつちに移ってきたのだ。

旅団の虚を突いて、ゴンが逃げ出す。それに気付いて駆け寄ったクラピカだが、ゴン

を背中側にやって守ろうとしたところで、脇腹に走った激痛と共に体勢を大きく崩す。直前にマシロが何か言った様だったが、クラピカの頭には届いてはいなかった。

窓を破って入った飛行船の中の空気は張り詰めていた。

クラピカ達と旅団、両者は睨み合ったまま剣呑な雰囲気醸し出していたが、マシロが入ってきたことでそれも壊れる。

まず動き出したのは人質の少年だ。旅団の拘束を振りきってクラピカの元へと走り出した。

その後ろ姿を見てマシロの中で警鐘が鳴り響く。

「その子の首の後ろに何か刺さってますよ!!」

マシロが警告するも遅かった。少年に殴られクラピカは壁際まで吹き飛ばす。

仲間に攻撃されるだなんて微塵も考えていなかったのだろう、防御が何も出来ていなかった。少年が念能力者として未熟とはいえ、あれでは大きなダメージを受けてしまっただろう。

センチツが少年の首に刺さっていたものを抜き取って壊した。少年は意識を取り戻したようで、周りをキョロキョロと見渡して首を傾げている。



マシロは一瞬、もう一人の少年とクラピカ達どちらをまず助けるか逡巡したが、小柄な男がクラピカ達に向かつて走り出したのを見て、銃を撃つ。

3発は男へ向かい、1発はクラピカ達の方へと向かう。

男は自分へと向かう銃弾を軽々と避け、クラピカへの攻撃を続けようとするが念の壁がそれを阻む。クラピカ達に向かった銃弾から天狐の産衣ガデーウス・ウォールを通路いっぱい発動させたのだ。

これで壁のこちらには旅団が4人にマシロが1人。教えてもらったクラピカの能力は、「束縛」「探索」「戒律」そして「回復」。クラピカが復帰するまではマシロ1人で4人を相手取らなければならない。

「……まったく、つくづくオレ達の邪魔をしてくれるよ。お前は」

「ああ、どこかで会ったことがあると思ったらクロロさん。あなたが旅団の団長リーダーだったとはね」

「意外だったのか?」

「いいえ、安心しました。あなた程の使い手が下っぱだったら、これから旅団の相手をするのに先が思いやられるところでしたよ」

「団長」

クロロの隣に居たジャージの男が、腕を回しながら自信たっぷりの笑みを張り付けて

歩み出てくる。手配書で面と名前が割れている一人で、フィinksという名前だった筈だ。

「ああ。殺せ」

フィinksスが猛然と向かってくる。マシロは降り下ろされる右腕をとって人質の少年を抱えている着物の女の方へと投げ飛ばす。

それがどうなったか見る前にフェイタンが斬りかかってきた。

”硬”を纏った右腕で受ける。折れる刀。がら空きの胴体。

”硬”を纏わせた蹴りを放つ。

フェイタンはしつかりと”堅”をしているが、マシロの”硬”からすれば紙でしかない。小手調べから入るような人間は、大抵マシロの神速の”流”から作られる”硬”によつて初手で敗れ去る。埒外の速さに追い付けないのだ。

しかし、蹴りが当たろうという瞬間マシロの前からフェイタンの体が消えた。

マシロの横に膨大なオーラが現れる。フィinksだ。マシロは壁を生み出し、いなして避ける。

壁は粉々になって消えたが、フィinksスの右腕の膨大なオーラも霧散して消え去った。どうやら一度何かを殴らせれば消えるらしい。

フィinksとフェイタンの二人を相手にしながらクロロをチラリと一瞥する。右手

の本が開かれている。やはり先程から二人が消えたり現れたりしているのはクロロの仕業だった。

まるで指揮者の様に二人を思うままに導いている。

敵の攻勢を突破するには、まずクロロから対処したいところだが、狭い船内ではフィUNKスとフェイタンの二人を振り切るのは難しい。静観している着物の女も今の形を崩そうとすれば動き出すかもしれない。

リスクをとって本腰を入れるかとマシロが考え始めたその時、船体に穴を開けて奇術師風の男が現れた。

「んー、面白そうなことやってるね♥? ボクも交ぜてよ♣?」

「ヒソカか。パクノダはどうなった?」

「無事さ◆? 飛行船はその彼に落とされちゃったけど、心配は無いさ♥?」

「そうか」

クラピカから聞かされていた動きの読めない協力者。果たしてこの場面で現れたのは、クラピカとクロロどちらの側につくためか。

マシロは戦いながらも注意深くヒソカに意識を向けておく。

「ああ、今夜は勃けって我慢出来ない♥? ボクらもパーティーをはじめるとしようか

♥?」

ヒソカが自分が今さっき入ってきた穴から消える。続いてすぐに、クロロが何かに引つ張られたかのように穴へと消えていった。

「団長?!」

着物の女も脇目も振らずマシロ達の横を抜け、クロロを追って穴へと躍り入った。どうやらヒソカはこの場面をクロロを分断する好機と捉えたようだった。

人質の二人は解放され、ヒソカの介入によって事態は一転マシロ達の優勢に傾いた。そして、クラピカの怪我也も回復していた。

「!!?」

念壁と船体の隙間から伸びた鎖がフェイタンを縛り上げる。

マシロとの戦闘の中、ヒソカの奇行で注意が散漫になっていた隙を突いたので。

「フェイタン!!」

鎖で首を絞められ、フェイタンは気を失う。

マシロは仕切りの念壁を消した。これで状況は多対一。

攻撃のギアを上げるマシロ。フィックスは念での防御が間に合わなくなっていく、ダメージを受け始める。

「しまッ……!!」

そして、遂にはフィックスもクラピカの鎖によって拘束される。

マシロがフィングスを気絶させる。戦いはここに終結した。

「やったわね、クラピカ！」

「……………ああ。礼を言う。マシロ。センリツ。ゴン」

「ううん、オレの方こそごめん、クラピカ。まんまと敵に操作されちゃって、それでクラピカにも怪我をさせちゃって…………」

ゴンが泣きそうな顔でクラピカに謝る。友達の手助けが出来ずに、それどころか大事な場面で害することになってしまったことを相当悔やんでいるようだった。

「気にしないでくれ、ゴン。元はと言えば私の暴走が招いたことだ。君とキルアには迷惑をかけた」

二人の会話をマシロは眩しいものを見るような眼差しで見ている。

マシロにはクラピカとゴンのような深く繋がり合った仲間と呼べる者はいなかった。自分の本音を言葉にするのが苦手で、いつも他人との間にある距離から線を引いてしまっていた。

それは生まれと生い立ちから来るもので、マシロの心にはいつも孤独と疎外感があった。

「キルア君も大丈夫そうよ」

センリツがキルアを抱えて戻って来る。外傷は無く、センリツの言うとおり問題は無

さそうだった。

クラピカとゴンは見るからにホツとした様子だ。

「それで、この二人はどうするんですか?」

捕らえた旅団員の処遇を訊ねる。

「……ハンター協会と世界刑事警察機構に知らせて身柄を引き取ってもらおうと思う。

悪いがセンリツ、迎えの人員が来るまで監視を手伝ってくれないか?」

「ええ、勿論いいわ」

囚われの旅団員が行き着く先は、念能力者専用の最高レベルの刑務所だろう。そこから脱獄出来た者は表向き一人も居ないという。

雨はまだ降り続けていたが、大都会の塵を洗い流したのか船体に開いた穴から入ってくる空気は澄んでいた。

ヒソカとクロ口の戦いがどうなるにせよ、今回の騒乱で幻影旅団は大きく戦力を落としたことは間違いない。

暫くはその傷も癒えることはないだろう。

## No. 008 ヨークシン×エピローグ

クラピカは寝込んでいた。ネオン達が移った宿泊先とは別の小さなホテルである。

内側から叩かれているような頭痛と倦怠感で、立っている事すら辛そうな様子にセンリツによって強引に休まされていた。

クラピカが無理をしないようにと、ゴン達3人が護衛を兼ねた見張りとして近くにいた。

昨夜の旅団との戦闘で緋の眼による“絶対時間”エンペライタイムを多用した事が体調不良の原因だった。

昨夜はあれからヨークシン近郊にある民間の飛行船発着場まで飛行船で飛び、その格納庫で捕らえた旅団員2人の身柄を引き渡すための人員の到着を待ったのだ。

明け方到着した協会から派遣された護送専門のハンターと世界刑事機構の捜査官達へと団員の引き渡しを完了させてクラピカとセンリツはヨークシンに戻って来たのだった。

……己の人生をなげうってでも復讐したいと憎んだ幻影旅団の人間を何故殺さなかったのか。

捕らえた瞬間は確かに尋問をした後に殺すつもりでいた。だが、マシロに旅団員の処遇を訊かれた時に不意に目に入ったゴンの不安に揺れる瞳を見て、殺意が急速に萎えていくのをクラピカは感じたのだ。

思えば、ゴンは始めからクラピカの敵討ちには消極的な姿勢だった。憎しみは理解しつつも、友人の手が血に塗れて汚れることを望まず、友人が復讐のために自分の人生を軽く扱うことも止めてあげたい。そう願うゴンの前で旅団の2人を殺すなどとは言えなかった。そして、人を殺すことに嬉々とするような己をゴンには見られたくないという思いがあった。

捕らえた旅団の処遇があれで良かったのか。

それは今も分からないが友達が悲しむような結末にしなかったことにはクラピカは納得していた。

部屋の扉がノックされる。

「よお、入るぞクラピカ。お客さんだ」

そう行つて入ってきたレオリオに続いてその後ろにはマシロの姿があった。

「休んでるところすいません。お加減はどうですか？」

「心配かけてすまない。少し無理をしたようだが、今日一日寝ていれば治ると思う」

「それは良かったです。お知らせしたいことがあるのですが、今いいですか？」



「ネオン<sup>ボス</sup>に何か問題でも起きたか？」

マシロに座るように促す。

「いえ、落札した緋の眼が消えて騒ぎはしましたけど問題は無いです。お知らせしたいのは、クロロとヒソカのことです。あの後どうなったのか調べたのですが、ヒソカの方が瀕死の重体で病院に運び込まれたようで、どうやら形としてはクロロ側が勝ったようですね」

「……そうか。だが、ヒソカに止めを刺さなかったところを見ると、刺す程の余裕はクロロにも無かったということか……」

ほとんど引き分けの様な決着だったのだろう。でなければクロロが裏切り者の止めを刺さずに見逃す事など有り得ないと思えた。

しかし、これで団長とマチが手負い、戦闘員の2人が捕まり、パクノダは鎖を打ち込まれ、ノブナガはマシロによって重傷を負い、ウボオーは死んだ。ヒソカも抜け、無傷なのは5人のみ。実に半数以上が欠けるか傷つくかしたことになる。今度は旅団による偽装ではなく真正正銘の半壊。

クラピカは一区切りついたという気分だった。憎しみは今だ消えずに残っているが、それは心の奥の方に沈み、今は今まで見ようとしてこなかったものに目を向けられたかのような解放感があつた。

これからは同胞の眼を取り戻すことに力を傾注する。

旅団の方は半壊の情報が出れば、マフィアや賞金稼ぎ、警察などに追い回されることになるだろう。壊滅はさせられなくとも、傷を癒すのを邪魔することにはなる。

「あ、そうだ。俺の仕事は明日で終わりになります。ネオンさんを空港まで送り届けたらそこで契約終了です」

「そうか……惜しいな。このまま仕事を続けてみないか？」

クラピカの本心だった。仕事仲間として不足なく、この先確固とした友情も築けるかもしれない。世界の汚さを幼い時分に知り、その思いを深める中で生きてきたクラピカにそう思わせるものがマシロにはあった。

「今日帰国されたノストラードさんにも慰留されました。でも——」

マシロが少し逡巡した。

「まあ、クラピカには言ってもいいかな。俺、マフィアとか嫌いなんですよ。今回は事情があったので妥協しましたけど、普段なら絶対仕事は受けません」

「そうなのか。ふふ。なら、引き留める訳にもいかないか」

クラピカはマシロが自分を見せたことに驚いたが嬉しくもあった。気さくだが自分からあまり歩み寄っては来ず、一定の距離からこちらも近づけないという感じの男が少し心を開いた。

マシロという知己を得られたのは、これからどこまで続くか分からないハンター人生において小さくない財産になるのだろう。

クラピカはそう思った。

ホテルのロビーに入ると何かが肌に感じてきた。

敵意という程明確なものでなく、しかしこちらに興味を持っているような、曖昧な違和感。

マシロは目だけを動かして周囲を探った。背を向けて長椅子に座っていた男が近づいてくる。

「マシロ…シロギヌかな？ 私はツエズゲラという」

髪を後ろに撫で付け、髭をきれいに整えた風格のある男だった。

「……そのツエズゲラさんが俺に何か用が？」

「突然の来訪は謝る。そう警戒しないでくれ。私はある人物の使いで来たのだ」

「ある人物？」

「バツテラ氏だ。聞いたことはあるだろう？ 彼は君がヨークシンに居ることを聞き付

けてね。是非君を食事に招待したいそうだ。受けてくれるかね？」

大富豪からの突然の招待への驚きよりも、マシロはこのツエズゲラという男がこのホテルに自分がいると特定した事に驚いた。ここに移ってまだ1日と経っておらず、それを特定したという事はこの男の能力の高さを示すと同時に、旅団に発見される恐れが高いということをも示した。

「人探しは私も些か得意とするところだね。そういう伝も幾つも持っているんだよ」  
動揺が伝わったのかもしれない。ツエズゲラが何でもな気に語りだした。

「分かりました。それでは、明日の夜にでもお受けいたします」

「感謝する。迎えはこのホテルでよろしいかな？」

「いえ、連絡をください。自分で向かえますので」

そう言うって携帯の番号が書かれた名刺を手渡す。

「了解した。それでは私はこれで。……………そうだ。A級首の幻影旅団の団員を捕まえたそうだね。おめでとうと言わせてくれ。それでは」

ツエズゲラが立ち去る。

情報の早さ1つとっても男の大きさが分かった。立ち合えば自分が勝てるかもしれないが、それとは別のところこそツエズゲラの本領があるのだろう。

「お、マシロ。クラピカはどうだった？」

エレベーターから犬を一匹伴ったスクワラが降りてきた。折られた右腕を吊っている。

「明日には復帰出来るそうですよ」

「そうか。そいつは良かった」

窮地を救ったからか、スクワラはマシロに対して気安くなっていた。そして、それをマシロも嫌がってはいなかった。自分から親しくする事は苦手だが、親しくされて悪い気はしない。

「散歩ですか？」

「ああ。ネオンお嬢様がうるさくつてかなわねえ。組長ボスが居ないから諫める人間もないしな。……ま、組長ボスが居たところで諫めやしねーか」

「急で悪いんですが、ホテルを変えますよ。不安が出てきました」

途端にスクワラの顔がうんざりしたものになった。

「マジかよ……。まあたネオンお嬢様が痲癩お嬢様を起こすぜ」

「買い物に出てもらいましょ。その間に荷物を運んでしまえば、ネオンさんはただ移ったホテルに帰ればいいだけです」

エレベーターに乗る。それにスクワラも続く。

エレベーター内を静寂が包む。スクワラは何か言いたいのかそわそわしている。

「どうかしたんですか？」

視線が宙を彷徨いながら、恐る恐るといった様子でスクワラは喋りだした。

「まあ、その……だな。オレ、エリザと結婚することにしたよ。エリザも頷いてくれた。それをお前に言っておきたくてな」

「……………え？ お二人って付き合ってたんですか!? ……あー、成る程。おめでとうございますって言えばいいんですかね？ 俺もこういうこと告げられるの初めてなんでよく分かりませんが」

「お前に助けられたおかげで結婚出来たもんだからな。礼を言つときたかつたんだ」

「じゃあ、この仕事は…………」

「ああ、辞める。お前は明日で契約終了だそうだが、オレ達は一度拠点に帰って身辺を整理してから退職する。……………それでだな。どうだマシロ、オレと組まないか？ お前とならない仕事が出来そうな気がするんだ」

「結婚するのなら護衛の仕事から足を洗った方がいいですよ」

「…………オレじゃやっぱり力不足か？」

「そうじゃなくてですね。護衛っていうのは、いざという時に依頼主の代わりに命を差し出さなければならぬと思うんです。だから家族がいる人は護衛の仕事は止めた方がいいと思うんですよ」

自分の命を他人のためにつかうのだ。そういう仕事に家族を持つ人間が就くべきではないというのがマシロの考えだった。

そしてそれが、マシロが悪人の護衛をしたくない理由だった。死ぬのなら満足して死にたい。悪人を護つて死んだのではそれが出来ない。

「スクワラの犬達つて皆優秀ですし、探偵業とか向いてるんじゃないですか？ 尾行とかの密偵でも力を発揮すると思うんですよ」

「探偵か……考えたこと無かったが、そうだな、ちよつと考えてみるわ」

18階でエレベーターが開く。

宿泊している部屋に近づくと、ネオンの騒ぐ声が聞こえてきた。

昨夜の地下競売が中止のまま再開されずに、後日のネットオークションに振り替えられた事を聞いて騒いでいるのだろう。純粋な人間なのだろうが、我慢というものを知らないネオンにマシロは頭が痛かった。

それにしても、恐ろしいのは幻影旅団だ。

全世界のマフィアとの対立も辞さずに地下競売を襲ったかと思えば、その幕引きに十老頭の皆殺しを図った。今頃マフィア達は幻影旅団への報復どころではないだろう。勢力図が一変するような地殻変動に、どこの組織も自組織の引き締めと勢力の伸長に忙しい筈だ。ネオンの父親も慌てて自分の縄張りに帰っていった。ネオンも一緒に連れ

帰ろうとしていたが、泣き喚いて抵抗したために娘は本来の予定通り旅行を楽しむことを渋々許したのだった。

部屋のドアを開けると一層ネオンの喚き声が大きくなった。

「お前、あれを止められるか？」

「……まあ、頑張ってみます」

ため息をこぼしながら、マシロは部屋の奥へと入っていった。



## No. 000 幕間×過去

？ ジャポンのオウホク地方には天狐伝説があつた。人が立ち入つた事の無い山深い原始林の奥地に神通力を備えた狐、すなわち天狐が棲まい、人に知恵を授けるといふものだ。

白銀の毛並みに燐光漂わせ、艶やかな着物を召した天狐は、ふらりと山から下りてきては、作物の収穫量を上げる栽培方法や寒さに強い稲の作り方、新しいお菓子や料理を人々に教えるのだ。天狐の加護を得たその地域は他のどの地域よりも豊かで、飢饉とは無縁であつた。

しかし、飽くなき欲望に取り憑かれた人間は更なる知識を吐かせるために天狐を捕まえようとした。

それに怒つた天狐は山に隠れた。

諦められない人間達は山狩りを行つたが、山に踏み行つた人間は尽くが魔獣や山の動物達によつて殺された。

それ以来天狐は人里に下りて来ることはなくなり、人々はようやく自分達の過ちに気が付いたのだつた。それが140年前の出来事。

マシロはそんな伝説が伝わる村に生まれた。

しかし、生後すぐに親から引き離され、名前をつけて貰う事もなかった。天狐への生け贄とされたためだ。

過ちに気付いた人々の間で、天狐への謝罪と贖罪のために供物を捧げる風習が出来ていた。毎年奉じる供物とは別に、10年に一度赤子を生け贄に捧げるのだ。マシロはその生け贄に選ばれたのである。

真つ白な絹の産衣を着せられ、山葡萄の蔓で編まれた籠に入れられたマシロは断崖の上から湖へと落とし入れられた。

普通ならば、まず助からない。籠が転覆してしまえば溺れてしまうし、転覆せずとも湖を漂いながら数日もしないうちに衰弱死することとなる。

しかし、何の因果かマシロはそうはならなかった。

湖の対岸に流れ着き、そこを山の魔獣に拾われて天狐の元へと届けられたのだ。天狐は生け贄にされた赤子を憐れみ、自分の元で育てることにした。

真つ白な髪に真つ白な産衣を着ていたことから「マシロ」と名付けられ、マシロは天狐の愛情に包まれてスクスクと成長した。

マシロには前世の記憶があった。微睡みの様な曖昧な意識の中で赤子の頃から世界を認識していた。

子供の頃のマシロはよくもの思いに耽った。川辺の水や崖上からの景色をぼんやりと眺めながら、自分の事やこの世界の事を考える。

マシロの中にいつももあるのは、自分の異物感と疎外感だった。

生まれたことを祝福されることもなく、捨てられるように生け贄に出された事が強いシヨックとして心に根付いている。前世から続く自意識が無ければ、ありのままに受け入れられたのだろうか、生け贄にされた体験のせいで自分はこの世界から歓迎されない余所者なのだと感じるようになってしまったのだ。

天狐が持っている世界のあらゆる知識が書かれている本で、前世とは大きく違うこの世界を知る度にその思いは大きくなっていくばかりだった。

自分の心や身体との繋がり、世界の有り様を考える日々が続いていたある時、体が白い靄で包まれていることにマシロは気が付いた。自然のままに流れ出していたその靄を留めると衣に包まれたような温かさを感じた。そしてそれは厚い所と薄い所というように移動させられるようだった。

この靄の事を尋ねると天狐は「念」と呼ばれる力について語り出した。

以前打ち明けられた二度目の生というマシロに起きた不可思議な事も念に依るものではないか。前世の世界は今ほもう痕跡も無く滅びた過去の文明だと考えれば一応の説明はつくと天狐は言った。

マシロは違うような気がしたが、それは自分がそう思っているだけで証明するものは何も無い。

次の日からマシロは天狐から念の扱い方を教わった。天狐も念が使い、いつも持つている本も念で作りだしたものだのだ。その本は全世界の書物という書物からデータ形式の文書、遺跡の壁画、はては個人の日記まで、あらゆる情報が取り出せるようになっていて、念に対する文書にもアクセス出来、マシロの理論的な理解を大きく助けた。マシロにとって念の修行は楽しかった。抱えた悩みも脇に置いて、ひたすらに熱中した。天狐も憂苦に囚われていたマシロが生き生きとし始めたのを見て胸を撫で下ろしていた。

心を覆っていた雲も晴れ始め、自分との折り合いがつく兆しが見え出した頃、マシロはふと自分が生まれた村に行ってみたくなくなった。自分が生け贄に出されてからそろそろ10年。次の生け贄が選ばれる頃合いだった。

マシロは険しい山道を通って、2日かけて人里へと下りていった。

そこそこの大きさの村だった。近くの里山の中から村を窺うと、大人は田畑で働き、子供はそここで走り回って遊んでいる。

村の中で一際大きな屋敷へと見つからないように近づいて行く。中に居た老人は帳面を幾つか広げて仕事をしていた。他にも人の気配はあり、注意しながら屋敷を探る。

倉の中の一角の藁ごぎの上には、米俵や酒樽に数種類の野菜や果実に菓子が置かれていた。天狐への供物だった。

屋敷を抜け出し、山へ入って歩いてみると、村からそう遠くない所で、きのこの入った籠を持った兄弟らしい子供二人が熊と対峙しているのをマシロは見つけた。

足がすくんで動けない兄弟を熊は獲物かどうか品定めしている。マシロは兄弟の前へ出て、熊を山奥へと追い返してやった。

真つ白の髪に天狐の毛を使った淡く光る装飾品を身につけたマシロを見た兄弟は、熊がいなくなったというのに呆然と立ち尽くしていた。

マシロは構わずに立ち去る。生け贄をどうやって辞めさせるかを考えなければならなかった。供物を揃えていたところからみて、数日中に執り行われてしまう。

途中出会った魔獣に村の見張りを頼んで天狐の元へとマシロは急いだ。

村人が行列を作って山の湖まで歩いていた。

提灯を持った男衆を先頭に、上等な絹の産衣を着せられた赤子を抱く女性を守るようにして列を成している。

湖への道は切り開かれ、人の手も入って整えられている。その道を通る村人達の前に立ちはだかる様に、突如として3体の魔獣が現れた。

村人達が騒然となる中、魔獣は声を揃えて生け贄を取り止めるよう言う。天狐は生け

贅など望んでおらず、怒っている。お前達の行っている風習は迷惑だと。

魔獣に追い返された村人達は大騒ぎとなった。

伝説になっていた天狐が生きている。天狐の生存が真実味を帯び、高揚している者が多かつた。

疑問を差し挟む者はいない。数日前に山へ入った兄弟が出会った白い髪の少年の存在が真実味を裏付けていたからだ。10年前の白い髪の赤子のことを村の大人達は憶えていた。その赤子が生きていたというのなら天狐の加護を受けたという事に他ならない。

その日から、半ばお伽噺と化していた天狐伝説は熱情と共に新たな息吹を得て、その村のみならず近隣の村々にも広がっていった。

生け贅という悪習が取り止められ、マシロはホツとしていた。

念の鍛練の方も雛鳥の殻が取れたように習熟し始め、”発”をそろそろ考えてもいい段階になっていた。

天狐との日々の生活の中で役に立つ能力がいいなとマシロは考えていたが、具体的なものは何も浮かんでいなかった。そんなマシロの考えを察したのか天狐は自分のための能力にするようマシロを諭す。自分はマシロをこの地に縛り付ける鎖ではなく、いつでも温かく帰りを待っている家でありたいと天狐は考えていた。だからマシロには異

郷と呼べるかもしれないこの世界で一人でも生きていける力をつけて欲しいと願っていた。

マシロにとつて、いつか山を下りる時が来るといふ実感は湧かなかつたが、天狐のおかげなのか、いつも感じていた孤独感は和らいでいた。

念を鍛え、書見をし、天狐が作った菜園の世話や山の動物や魔獣と遊ぶ幸福な日々が続いていた。

ある日、マシロは魚の薫製を作るために釣りをしていた。家から離れた幅のひろい川である。

釣った魚は血抜きをし、魚籠に入れる。運がいい日だったようで、魚籠はすぐに一杯になった。

足取り軽く帰り道を歩いていると、ふと魔獣が倒れているのに気がつく。既にこと切れており、肩から腹にかけてぱっくりと切られていた。

注意しながら進んでいると、同じ様な傷を作つて死んでいる魔獣が点々としている。その数は家が近づくにしたがって段々と増えていく。

マシロは胸騒ぎを覚え、魚籠を放り出して走りだした。

家の周りは悪夢だった。木組みの家は燃え、菜園は荒れている。天狐を慕っていた魔獣や動物の死体がそこそこにある。

男が立っていた。

黒いマントを纏ったその男は強靱な、しかし薄汚れた様なオーラを発していた。

男は天狐の噂を聞き付けてやって来たハンターだった。山中に入ってから外敵の侵入を拒むように襲ってきた魔獣達を排除してここまでやって来ていた。天狐を守るために集まってきた魔獣も動物も駆除するように無造作に殺し尽くした。

その男の足元には天狐が倒れ伏している。

マシロは目の前が真っ赤になった。遮二無二男に突っ込む。男はその突進を軽くいなすと念で強化したマントで切りつけた。

オーラの防御で致命的な傷にはならなかったが、マシロは突進の勢いのまま地面に倒れた。

爆発した怒りで体を思うように動かせなかった。元より戦いの経験が皆無なマシロは、前世を通して初めての怒りの氾濫に我を忘れていた。

もがくようにして立ち上がったマシロは、ただただ感情のままに突っ込んで男の攻撃をいように受けた。何度も同じことをしていると、やがてマシロは立ち上がれなくなった。途中から幾らか冷静さは取り戻していたが、男には手も足も出なかった。

それでもマシロは男を殺意を持って睨み付ける。

男がマシロを殺そうと近づいていく。マントを纏った片腕が広げられる。そして蝙



蝠の様な翼に変化した。それはとても力強く、マントを使った攻撃のような軽さは感じられない。

男がマシロの前で止まる。冷たくマシロを見下ろしていた。

翼が振り下ろされるといふ時、天狐が男に組付いた。着物は土に塗れていたが目には闘志があつた。

男は振りほどき翼を打ちつける。

天狐の闘志は消えない。

何度打つても反抗的な態度を崩さない天狐に苛つき出す男。天狐は痣をつくり、血も流している。

止める事も出来ずに見ているしかないマシロの内にまた感情が渦巻き始めた。今度は怒りだけではない。それよりも強く、大きく――

男の忍耐が遂にキれる。生け捕りを止め、持ち帰るのは死体でも良しとした。輝く毛皮を持つ天狐の剥製は、さぞや美しいことだろう。男の翼に殺意が籠る。

オーラが迸つた。男の翼が壁のようなもので止められていた。壁はボロボロになつて崩れて消える。

男が振り返ると、マシロが立ち上がつていた。マシロのオーラは今までになく澄んでいた。感情の暴走による乱れは無く、天狐を守らなければという強い想いが漲つてい

た。

うろちよると目障りなマシロに、男の苛立ちは殺意に達する。翼をまたたかせて男は飛翔した。

上空を旋回し、勢いをつけて降下。マシロは避けることが出来ない。受け止めたものの膝を着き、地面に崩れ伏す。男が翼で殴る。

マシロは吹き飛び、木を幾つも薙ぎ倒して森の奥へと消えていった。

目的をようやく遂げられるというところで、男は天狐の姿がない事に気付く。逃げたかと辺りを見渡すと、燃え盛る家の前でその姿を見つけた。

天狐は何の気負いも感じさせない足取りで家の中へと消えていった。自分の2000年の人生とマシロとの14年間の思い出を胸に自死を選んだのだ。天狐は悲しみと満足感を抱きながら、炎に包まれてその生を終えた。

あと一步のところまで全てを台無しにされた男の怒声が山中に響き渡った。

マシロが気がついた時には日が暮れていた。呻きを洩らしながら体を起こす。体中の痛みで立ち上がるのに苦労したが、自分の状態よりも天狐がどうなったかが心配で、

よろめきながらもマシロは家へと急いだ。

森を抜ける。

隠れていたのであろう、山のあらゆる動物や魔獣が燃え落ちた家を囲んでいた。

その光景を見てマシロの心にじわりと絶望が滲み出した。

マシロに気付いた動物達が道を空ける。何かが倒れている。それを視線から外せず  
に呆然とマシロは近づいていく。

着物の切れ端が燃え残っている。マシロは膝から崩れ落ちた。

こんな理不尽があつていいのだろうか。昨日まで普通に笑いあつて、食事が代わり映  
えしないから、じゃあ魚の薫製を作ってみようかとなつて。それなのに、何の謂われも  
無く日常をぶち壊された。天狐はこんな形で死んでいい存在じゃなかつた……。

マシロの慟哭はいつまでも止まなかつた。

マシロは天狐の墓を作つた。その周りは、天狐を守ろうとして死んでいった魔獣と動  
物の墓だ。

花の種も蒔いた。時期が来ればこの墓はたくさんの花に包まれるだろう。

傷を癒したマシロは山を下りることにした。

旅立ちへの希望も何も無く、一人きりになつたマシロには、天狐との生活で鳴りを潜  
めていた自分の異物感と孤独感がまた頭をもたげ出していた。

それからのマシロは山を襲った男の情報を探めながら、力をつけるための研鑽を積んでいった。

有力者の食客のような事をしたり、名のある道場で寄宿させてもらったりと、ひとところには腰を落ち着けずに流れ歩いた。

理不尽な目に遭っている人達を助けたりしているうちに、そういう人達の護衛を仕事にするようになった。そんなある日、同業者が皆背を向ける仕事に出会った。

世界一の暗殺者から依頼人を守る仕事である。

自分の実力に自信の無い者は勿論、経歴に傷をつけたくない者まで、皆がその仕事を敬遠していた。

そんな中でマシロは躊躇せずにその仕事を受けた。

自分の力を測るために。そして何より自分かわいさに人を見捨てるなんてことをしなくなかったからだ。

結果として、仕事は成功した。どうにか暗殺者を退かせることに成功し、依頼人を守り抜くことが出来た。

自分が強いなどと自負を持てる程には強くないと思ひ知らされたが、より高みへ上るための道筋が見え、マシロは自分を鍛えあげた。

新たに自信がついた頃、山を襲った男の正体が判明する。

ハンター証ライセンスを使って各国の護衛官養成訓練プログラムを受講している時に、世界の有力とされているマフィアの情報を見ることが出来たのだ。

男は十老頭の懐刀である陰獣と呼ばれるメンバーの一人になっていた。名を「蝙蝠」。遂に仇を見つけ出し、7年前に自分がやった事を思い出させてやろうと憎しみを再燃させた。

しかし、実際にその男の姿を肉眼で捉えて、マシロは言いようもなく失望した。

7年前に感じたあの自分を圧倒した強さを全く感じなかったのだ。自分より弱い者を従えて偉そうにしている様子に矮小さささえ感じた。

こんな小者に復讐するために自分はいままで生きてきたのか。

そう思うと苛立ちすらつづつた。感情のままに拳を地面に打ちつけると、マシロはその場を後にした。

あの程度の実力で闇の世界を生きていくというのなら、そのうち必ずや身を滅ぼす事になる。

そしてその知らせはそれ程時を経ずにやって来た。

マフィアの依頼を渋々受けた折りに、陰獣が幻影旅団によって全滅した事を知った。やはりマシロが手を下さなくとも勝手に滅びる程度の男だった。

そのマフィアの依頼で、マシロは仕事仲間としてクラピカと出会った。

その中でクラピカの過去を知ったマシロは、その境遇に心を痛めた。だが、同時にどこか羨ましさもあつた。

己の全生涯をかけても討ち滅ぼせるか分からない仇敵を抱えて、その相手に脇目もふらずに自分の全感情をぶつけることが出来るのだ。

歪んだ憧憬ではあるが、肩透かしのような形で復讐が決着したマシロにとっては、羨ましくもあつたのだ。

前を向けるような終わり方になればいい。そう思つて、マシロはクラピカの復讐の手助けをした。

マシロは護衛という仕事に誇りを持つている。これからも理不尽に襲いかかられて成す術の無い人のために力を貸していくだろう。

## No. 009 バッテラ×会食

バッテラ氏から招待されたレストランは、ヨークシンの一等地に建つ高層ビルの中にあつた。シックながらも現代的な装いのその店は、完全予約会員制らしく雑多な都心の中とは思えないほどに異空間の様な静けさがあつた。

客同士が顔を会わせない造りになっており、ウェイターに案内されている最中もマシ口は誰とも出会わなかつた。

間接照明の落ち着いた雰囲気の通路を通つて案内された先は一番奥の部屋。部屋の前に立つ黒服の男にウェイターが取りつぐと、黒服の男はノックをしてから扉を開けた。中は個室というには広々としており、ヨークシンの夜景を見下ろす一面ガラス張りの窓が印象的な部屋だつた。

高級な調度品で飾られたその部屋の中でバッテラとツエズゲラが席から立ち上がつてマシ口を迎え入れる。

マシ口は招待への礼を告げ、促された席へと着いた。

「いや、よく来てくれた。君と話をしてみたいと以前から思っていたんだ」  
「それは光栄です」

バッテラが笑顔でマシロに話し掛ける。その態度には敬意と好意が表れていた。

ゼノとの一件以来マシロに阿ねるような機嫌取りの手合いは増えたが、バッテラのそれはそういう者達とはどこか違った。”感謝のような喜び”。そんな微かな機微をマシロに感じさせた。

ウェイターがカートに乗せて運んできた料理をテーブルへと並べていく。

「マシロ君、酒はどうかね？」

「遠慮しておきます。どうも舌が子供なのか、お酒が美味しいと思えないタチでして」

「はははは、そうか。私も若い頃は酒の味が分からなかったものだが、付き合いで飲んでいるうちに覚えたものだよ」

料理に舌鼓を打ちながら、和やかに歓談する。

バッテラはマシロのこれまでの仕事に興味があるようで、色々と話を求めた。ツエズゲラも基本は聞きに徹しながらもたまに話に加わり、時間は和やかに進んでいった。

そんな中バッテラの食事の手がふと止まる。

バッテラアイコンタクトを受け取ったツエズゲラがおもむろに口を開いた。

「突然不躰な事を頼んですまないが、君の”練”を見せてくれないか？」

「……急にどうしたんです？」

「君の実力に興味があるんだ。私も……バッテラさんも。」



困惑しながらバツテラを見ると、「お願いする」とバツテラからも頼まれてしまう。少し思案したが、仕事に繋がるかもしれないなら損でないと考えマシロは席を立つ。何を見せればいいのかと思案しながら空いたスペースに移動して二人に向き直る。

「んー……じゃあ、シャドーやります」

息を詰めて見守るバツテラとツエズゲラ。

その視線を受けて、マシロは左のジャブから入る。起こりの見えないジャブ。次いで右の上段蹴り。反転して肘打ち。また反転して後ろ足払い。

速度がどんどん上がっていく。右の蹴り上げからパンチのラツシュ。飛び後ろ蹴りからかかと落とし。半円を描くように斜め後ろに跳ぶフォーリア。左のローからハイ。交換して右のハイの連続キック。

息つく暇の無いマシロのシャドーにバツテラは息を呑んで魅入る。

バク転からのバク宙で締め。

「素晴らしい!!」

バツテラは立ち上がって惜しみのない称賛の拍手を送る。

バツテラが横を見ると隣に座るツエズゲラは啞然と言葉無く固まっていた。

そのツエズゲラの様子をバツテラは訝しんだ。

「どうしたのだ?」

声を掛けられたことでツエズゲラはハツと我に返る。

「いや、失礼。想像だにしていなかったものを……見せられましたので、つい……」

「確かに素晴らしかったが、一流のハンターである君が言葉を失うほどのものだったのかね？」

「……念には“硬”と“流”という技術があるのです。“硬”は全オーラを一点に集める技術。“流”はオーラを移動させる技術。彼が今見せてくれたシャドーは体の動きだけみても確かに目を見張るものでしたが、本当のすごさはそこじゃない……」

ツエズゲラは唇を戦慄かせた。

「シャドーによる仮想敵へのインパクトの瞬間瞬間に、攻撃する部位へと何の予兆もなく全オーラが一瞬で集まっているのです。インパクトの瞬間に“硬”。それ以外の時間は全身にオーラを纏う“堅”。それを行える程速く静かな“流”を私は見た事がない……」

常は泰然としているツエズゲラの初めて見せる姿にバッテラは意外なものを見た思いだった。今見たマシロのシャドーは念を使える者にとつてこそ驚愕のものらしい。

「……彼を買いなさい、バッテラさん。彼を自由に使えるのなら金なんて幾ら出してでも惜しくはない」

ツエズゲラのその言葉にバッテラは今度こそ驚いた。一ツ星<sup>シングル</sup>の称号を持つ世界でも

有数のプロハンターにここまで言わせるマシロという青年。どうやら自分が思っていた以上の傑物らしかった。

シャドーを終えたマシロは元の席に戻ってグラスに入った水で喉を潤した。

「君はグリードアイランドというゲームに興味はないかね？」

バツテラが話し始める。その目は真剣だった。

「……念能力者専用のゲームでしたか？」

「知っているのかね？」

「最近知り合った子が話題にしてみましたので概要位は」

「そうだ。そして私は、そのゲームのクリアを欲している。今日行われたオークションで落札したものは何者かの襲撃に遭って奪われてしまったが、残りの6本は何がなんでも手中に収めるつもりだ。そこでどうだろうか、君もこのゲームに挑戦してくれないだろうか？」

「バツテラさん」

ツエズゲラがプレイヤーではなく護衛として雇えと口を挟もうとしたが、バツテラは分かっていると手を上げて制止した。

「クリアした者への報酬は500億という事になっているが、それでは君とツエズゲラが喰い合ってしまう。私は君たちが協力し合うことが望ましいと思っただが、報酬

の山分けとなれば先に攻略に取りかかっているツエズゲラは面白くないだろう。そこで提案だが、月10億<sup>ジュエニー</sup>Jを支払う。それで私のボディーガードになつてくれないだろうか」

「……名目上はボディーガードですが、その仕事内容はグリードアイランドの攻略ですか」

「君が望むのならその報酬でクリア後も契約し続けてもいい」

1ヶ月10億の複数年契約。バッテラがマシロを高く買っていることの証左。この上なく破格な条件だ。

だが、マシロの肚は初めから決まっていた。

「大変有り難いお話ですが、お断りさせて下さい」

「10億で足りないのならもつと払ってもいいし、君の要望も可能な限り叶えよう」

「いえ、今俺が欲しいのはお金じゃ無いんです」

「では何かね?」

「……経験……か?」

ツエズゲラがぼそりと呟いた。

「そうです。今の俺は護衛者としての経験が何より欲しい」

然も有りなんとツエズゲラは頷く。

「だが、グリードアイランドを攻略することも得難い経験になる筈だ」

それでもツエズゲラは反論する。さっきのシャドーを見て、攻略にはマシロが必要だと感じたからだ。

これから先クリアに向かっていく中でカード入手の難易度の増加とプレイヤー同士の衝突が予想される。そこに戦いに長けたマシロが一人居るだけで、取れる選択肢が大幅に増える。

「グリードアイランドはゲームと言っても、コンピューターを相手にするような単純なものではない。ハンター専用と言うだけあって、頭脳も体力も必要な命を懸けたものだ。そこで得られる経験は必ず君のためになる」

「そうかもしれない。ですがタイミングが悪い」

「タイミング?」

「俺はまだキャリアが浅い。それに加えて仕事を再開して、まだ1件しかこなしていないんです。今はまだ護衛以外の仕事は考えられません」

「……………そう……………か」

椅子の背もたれに背を預けてツエズゲラは溜め息をついた。マシロの迷いの無い目を見て説得は無理だと諦めたのだ。

そしてそれはバツテラも同じだった。

迷い無く自分の道を進むマシロに若かった頃の自分の姿が重なった。一つ一つの事が経験となり自分の成長を感じられる今が一番楽しい時期なのだろう。確かに脇目を振っている時間も惜しい。

「……実に残念だ。だが、純粋なボディーガードの仕事ならば受けてくれるのだろうか？」  
バッテラは微笑んだ。

「必要になった時には是非とも君に頼みたいものだ」  
「ええ、喜んで」

マシロは笑顔で頷いた。

## No. 010 新しい依頼×NGL

仲介業者へ来るマシロへの依頼は受けきれない程だった。バッテリーが話をしたのか上流階級や世界有数の資産家からの問い合わせも増え、幻影旅団の団員逮捕に貢献したという情報がそれらに更に拍車をかけていた。

対応のほとんどを仲介業者に任せ、マシロはそこで切迫していると思われるものを選んで受け続けた。

脅迫された歌手や掲げる政策が原因で命を狙われた政治家、組織の腐敗を暴こうとした警察官、マフィアと政治家の裏取引のネタを掴んだ記者、開発予定の重要な土地の一部を相続してしまい地上げのヤクザに狙われた少女、等々。

思いがけない形で依頼を受けることもあったが、報酬の多寡に関わらず受けた。

簡単に終わるものもあれば、根の深いものもあり、その中でも脅威となる者が判明している場合はそれらを取り除いていった。

探偵業を始めたスクワラにも度々協力してもらったこととなった。護衛対象の脅威となつている人物の情報収集や犯罪の証拠集め等にスクワラは力を発揮し、マシロ共々世間に名を知られる事となった。

暗殺者に対するカウンセラーとして地位を築きつつあるマシロは、9月のオークション後から年が変わっても忙しく働いていたが、春の暖かさを感じ始めた頃ようやくその忙しさにも一段落ついてきていた。

そういう時にやって来た一つの依頼がマシロの興味を引いた。

ITの分野で成功を取めている実業家からのNGL自治国への随行依頼だ。

自分が創設した自然保護団体のNGL自治国で行っている自然調査の視察に行きたいので付いてきてくれというものだった。その実業家は動植物に対して並々ならぬ熱情があるようで、長期休暇を取って自ら赴くというのを再三制止してきた部下の忠言を容れての依頼だった。文明から切り離された上に色々黒い噂もある国へ社長が行くことが不安ということらしい。

自然溢れる所へ行くのも気分転換になっていいかもしれないと考えたマシロは、その依頼を受けた。深い山の中で育ったマシロの一種の郷愁の表れとも言えた。

NGL国境の検問所。

機械文明の恩恵を受けた物は全て取り上げられ、天然素材の商品と交換させられたが、それ以上の検査は無くあっさりとして入国を許可された。

「NGLの入国審査は厳しいと聞いていたんですが、えらく簡単に通れましたね……」

「国の理念に感銘を受けたと言って、自然調査の申請をした折りに少くない額の献金



をしたからね。多少は気を利かさせたのだろう」

「だからといって機械を隠し持てば、問答無用で拘束されるだろうがね」と言つて、笑いながらロセスは歩いていく。

ロセスはログラムは四十を幾つか越えているが、若々しく澆刺とした男だった。

移動用の馬を借りるため、二人は国境に近接した牧場に向かつていた。調査チームとは連絡が取れてあり、そのベースキャンプまで馬で向かうことになる。

ベースキャンプまではNGLがつけた案内人の先導で野宿を挟んで一日。

調査チームは川を見下ろす場所にある丘の抉れた平場を拠点としていた。荷馬車を壁に、土で囲われた平場に天幕を張つてある。一角には小型の動物や昆虫を入れた籠が並べてあつた。

「やあ！諸君ご苦労。調子の方はどうだね」

ロセスはさういふとベースキャンプの中へと入つていく。マシロは乗つて来た馬を案内人に渡してからその後が続いた。案内人は調査チームに同行していた仲間の案内人と分担して、馬を下の川へと連れていった。

「ああ、ロセスさん。順調ですよ。新種と思われる動植物を幾つも発見しましたし、なんと絶滅危惧の希少植物が群生している場所も見つけたんですよ。ただ、機械類を持ち込めないのが痛いですね。カメラも無いから発見したものをいちいち描き表さないとい

けない」

「男が指し示した先では動物や昆虫が入った籠の前で紙に向かっている者が何人かいた。」

「それよりロセスさん。捕獲した生き物の持ち出しの禁止って約定、何とかありませんかね？ 絶滅危惧の植物を持ち出せれば、自分達で繁殖させられるんですが」

「ん、それは無理だろう。今回の調査を受け入れてもらうのだって苦労したのだから。そんな事したら次調査したいとも受け入れてもらえないよ」

ロセスは生き物が入った籠を興味津々に見て回っている。

男はその背中を見ながら仕方がないと溜め息をついた。

次の日からロセスは調査チームの活動について回った。メンバーに色々教えてもらいながら楽しそうにしている。

マシロもそんなロセスから離れ過ぎないようにしながらもリラックスして森を散策した。そんな日が何日か続いたある日、マシロは足を踏み入れた森に異変を感じた。動物達が息を潜めているのか森全体にどこか生気がない。

”円”で周囲を探る。異変は無い。

マシロはオーラを棒状に伸ばし、それを自身を起点にレーダーアンテナの様にくるりと回転させた。マシロが編み出した”円”の応用で、オーラの操作難度と把握難度は格

段に上がるが、通常円で探れる距離を大きく伸ばす事が出来る。マシロの場合、通常円では半径180メートルが現在の最大距離だが応用円ではその距離は1100メートルにまで伸びる。

その応用円に異物が引っ掛かった。人間の大人程の大きさをした知らない形をした生き物だ。問題なのはその生き物の前に人間の子供が二人いることだ。

マシロはロセス達に状況を伝えて駆け出した。

岩場を飛び越え、木々を縫って駆ける。山奥で育ったため馴れたものだった。

急斜面を飛び降り、枝を掴んで着地する。兄らしい子供が妹を庇って釣竿を構えている。

子供を襲おうとしている生物は蟹に似ているが違う外観を持つ知らない生き物だった。

背後から近づき、腰にある甲殻の継ぎ目をナイフで切り裂く。ナイフは国境の検問所で手に入れたもので、常用しているものに比べて粗悪品といってよかったが、“周”で強化することによって抵抗無く刃は致命傷を与えた。

謎の生物は仰け反りながら痛みで叫ぶ。

マシロは切り裂いた傷口に念弾を叩き込んだ。

謎の生物は断末魔を上げて、前のめりに地面に倒れ伏した。

絶命したのを確認してからマシロは子供達に近寄った。

「大丈夫だったかい？ 君達」

状況の変化についていけなかったのか子供達は暫し呆然としていたが、マシロがしゃがみこんで目線を合わせると、安心したのかマシロにすがりついて泣き出してしまった。

「あーほらほら、そんなに泣かないで。もう大丈夫だから、ね。お兄さんがおうちまで送っていつてあげるから」

地面に散乱していた魚を落ちていたざるに集めて子供達に持たせてから、兄妹を片腕ずつで抱き上げる。

「さあ、おうちはどうちだい？」

兄の方が弱々しく指で方角を指す。

その頃になって、ようやくロセス達が追い付いてきた。調査チームの面々は、死んでいる蟹に似た生物を見て騒ぎだしている。持ち帰ろうとしているのか、木を切つて担架の様なものを作り始めた。

二人を抱えながら歩いていると、程なくして木々の合間から村らしきものが見えてきた。

「……あそこがぼくの村」

家に着いてホツとしたのだろう、二人とも顔の強張りが取れて体の力も抜けていた。村に入ると畑仕事をしていた若い女性がこちらに気づいて駆け寄ってきた。女の子がその女性に向かって手を伸ばしたので、二人を降ろしてあげると女性に向かって駆け出した。

「お母ぎあああああん……………ッ」

女性に抱きついて、兄妹は泣きじやくりだした。

「どうしたの二人とも……………!？」

女性は困惑している。

泣きじやくつて要領を得ない兄妹を連れて、マシロも家へと招かれた。

マシロがあつた事を説明する。すると女性は事の重大さに気づいて兄妹を抱き締めながら、マシロに礼を述べた。

「この辺には人を襲うような、あんな変な生き物がいるんですか？」

「……………いえ、そんな生き物初めて聞きました。この辺で人を襲う動物といえは熊くらいですが、それでも滅多にそういう事もありませんし……………」

「となると、どこかから流れてきた新種……………？」

マシロが兄妹の母親と話していると家の外がざわつき出した。外に出てみるとロセス達調査チームが村にやって来ていた。

例の謎の生物も運び込んでおり、村人達がそれを見てざわついている。ロセスは村の老人と何やら話をしていた。

「あの生き物、こつちに運んできたんですか?」

「ああマシロ君か。この村の方が近かつたんでね。この村の代表者とも話して拠点をごに移す許可も貰ったところだ。君も拠点の移動を手伝ってくれ」

謎の生物に興味を持った調査チームは、この村を拠点に違う個体がないか搜索するらしい。マシロも手伝つてその日の内に拠点の移動を完了させた。

謎の生物に夢中な様子の子の調査チームの面々は毎日の様に侃々諤々と議論を交わしていた。

専門家が集まっても意見が一致しないようで、純粹に未確認の新種だとか、体の造りが既存の生物の継ぎ接ぎみたいでおかしいことからNGLが極秘に開発した生物兵器だとか、メンバーは飽きることも無く熱に浮かされた様に話し合いを続けていた。

マシロはというと、ロセスが村の外の探索についていけない時は時間が出るので、念の技術の向上に努めたりしていた。

バツテラ達に見せたシャドーは“流”を磨くために始めたのだが、所詮は相手が居ないシャドー。今では完璧にこなせるようになってしまい、最近は上達が頭打ちになってきた。

マシロの訓練は娯楽の少ない村の子供達には刺激的なようで、マシロが助けたクルトとレイナもマシロの後を付いて回るようになっていた。暇な時間には子供達と遊んだりもした。

そういう日々が続いていたある日、村の外から人がやって来た。

ポツクルと名乗るプロハンターが率いるチームで、NGLに入り込んだ可能性のある新種の生物の搜索に来たとのことだった。

心当たりのあつた調査チームは、先日の蟹に似た生物の事を話した。死体は埋めてしまったので、記録したものを見せるとポツクル達は確信したかのように頷き合った。

”超大型のキメラアントが繁殖している”

その確信を得たポツクル達は、自衛出来ないのならばNGLから出た方がいいと言い残して村を去っていった。

## No. 011 救出×地獄

ポツクル達に忠告を受けた調査チームだったがそれで素直に帰るといふ者はおらず、むしろキメラアントの新種を調査出来る第一線に居ることに気炎を上げていた。

しかし、そんな調査チームの意気を挫く出来事が起こる。

いつもの様に森を探索していた時の事だ。ベースキャンプのある村からかなり離れた場所を探索していると、遠くの空に一団となつて飛ぶなにかの群れを見つけた。視認出来る所まで近づいた調査チームは戦慄した。

異形の生物達が大勢の人間を運んでいたのだ。

人間は誰もがぐつたりとした様子で、この先彼らが愉快な事にならないのは容易に想像が出来た。

調査チームが受けた衝撃は如何程だっただろうか。キメラアントの新種に出くわしても1体や2体ならば問題にならないと考えていたのが、人間を運ぶ大群を前にして、とてもではないが事態は自分達が想像していた規模を遥かに越えていることを思い知ったのだ。

村に戻った調査チームはその事をロセスに報告して、すぐに帰国の準備を始める。そ



れを聞いていた村人達は浮き足立つ。マシロが倒した蟹に似た生物を見ているために、その同類が大群で人間を襲っていると聞いて恐怖したのだ。”自然のままに”という NGL の理念に共感していようが自分の死を前にして恬淡と受け入れられるかどうかは別の話だ。

村人の中でも一際怯えているのはクルトとレイナだ。何しろ実際に一度襲われたのだから、当然のことだった。

マシロはそんな兄妹を見てみぬ振りをすることは出来ず、ロセス達を国境まで送つたらまた戻ってくると約束を交わした。

夜の行程は控え、次の日の日の出と共に出発となった。

NGL の案内人とマシロが先頭になって、国境までの最短距離をなるべく休憩を取らずに急いだ。そして翌早朝、一行は国境の検問所に無事到着する。

調査チームが検問所の人間に事態のあらましを懸命に説明するが徒労だった。NGL の理念が邪魔をして「それは大変だ」と言うだけで誰も対応しようとはしない。諦めた調査チームは、然るべき機関に通報するために国境を越えた。

ロセスとの護衛契約を完了させたマシロは来た道を取って返す。

案内人を断り、馬にも乗らずに走り出す。調査チームがカメラアンプを見た地点がクルトとレイナの村から離れていたとはいえ、いつ標的にされるか分からない。

走っているとマシロの耳に微かに銃声が届いた。

立ち止まって方角を確認する。

進路を変える。

機械文明を拒むNGLで銃声が聞こえるというのは容易ならざる事だ。カメラアントもそこに居るかもしれない。

調査チームがカメラアントを見た日は、マシロはロセスと共に村に残っていたために現場を見ていない。そのため、マシロはカメラアントの群れというものを一度自分の目で見ておきたかった。

山の中を注意しながら走っていると、木陰に隠れるようにして立っている異形の生物を見つける。この間倒した生物とは似ていないが、あれもカメラアントだと思われた。

幸いそのカメラアントはマシロにまだ気づいていなかった。

観察しながら、注意して近づいて行く。何かを待ち伏せしているかの様なそのカメラアントの右手には拳銃が握られていた。拳銃を使えるのだとしたら、この間の個体より知能が高いことになる。

カメラアントの向こう側から誰かの走る音が聞こえてきた。ポツクルと名乗ったプロハンターと一緒に居た女性だ。

何かから逃げるのに懸命な様子で待ち伏せしているカメラアントに気づいていない。

念弾を放つ。

女性を撃ち殺そうと拳銃を構えたキメラアントの頭蓋を粉碎して、その後ろの木の幹を大きく抉った。

「大丈夫ですか？」

マシロが姿を見せた頃になって、女性はようやく自分がキメラアントに襲われそうになったところを助けられたのだと理解した。

「……………他の人たちはどうしたんです？」

「な……………仲間……………殺されてツ、さ、拐われて…………ツ。助けないと…………!!」

「落ち着いて下さい。俺が力になりますから」

気が逸つて口が上手く回らなかつた女性だが、肩に置かれたマシロの右手の体温を感じて、ようやく落ち着きを取り戻し始めた。

女性の名前はポンズといい、キメラアントに襲われて仲間を二人殺され、リーダーのポツクルは拐われてしまったとのことだった。

「どつちに向かったかわかりますか？」

聞けば拐われてからまだ間もない。巣に連れ込まれる前に追い付ける。

「え、ええ。…………キメラアントを観察して、その巣の場所も分かるわ」

「ならば行きましょう」

「ほ、本当に大丈夫なの？ 奴等の中には念が見えるのもいたわ。第一、奴等は人間とは比べ物にもならない程力が強いだよ。他に助けを呼んでからの方が……」

「それでは恐らく間に合いません」

救援を呼びに行つて戻つて来るまでに何日かかることか分からない。

ロセス達調査チームが一足早く報告しているだろうとはいえ、部隊を整え国境の間を説き伏せて再びここに戻つてくるまでに果たしてポツクルが無事でいられるかどうか。

「この場にいる俺たちだけで、どうにかするしかありません。大丈夫。俺が助けてみせますよ」

ポンズは不承不承頷いた。

たしかに救援を連れて戻つてくるような余裕はポツクルにはないだろうし、何より冷静になってよく見てみればマシロは見たことの無い位の力強いオーラを纏っていた。もしかしたらマシロに出会えたことはこの上なく幸運なことなのかもしれない。

ポツクルを拐つたキメラアントの追跡を開始する。

ポンス達が襲われた場所とキメラアントの巢の場所を結んだ直線上のどこかを移動していると推測し追跡する。

しばらくの後、崖下を移動するキメラアントの群れを発見した。6、70匹の群れだ。

どこかの村を襲つたのだろう、人間を大勢運んでいる。その中にポツクルもいた。「い、いた! ……いたけど数が多すぎる。あんなにいたんじゃ、とてもじゃないけど助けられない。……………どうするの?」

「奇襲。殲滅」

マシロとポンスは崖の上から眼下の様子を探る。

確かに数は多いが脅威になりそうなのは、先頭にいる一匹とそれに比べれば大分劣るが、その近くにいる四匹だけだ。

「行きます」

そう言うや否や、マシロはキメラアントの先頭に向かって走りだし、崖を飛び降りる。ギリギリまで気づかれぬように「絶」で気配を絶つ。狙いは先頭の蠍の尾を持つキメラアント。

踏みつけようという段階になって、何か違和感を感じたのか直前で気づかれる。が、回避は間に合わず、右半身はそのまま潰すことに成功する。

「ツツぐいあ!!? 何者……………!!」

まだ息を残していたが、ポンスを襲おうとしたキメラアントから調達した拳銃で頭を撃ち抜く。「周」で強化したそれは難なく頭蓋を貫通し、蠍型を絶命させる。

「え、あ!?! ……ザザンさ」

蜘蛛型のキメラアントの言葉が終わらない内に、同じように拳銃で殺す。

自分達が襲われるとは微塵も考えていなかったのか、どいつもこいつも反応が遅かった。

間断無く残りの三匹も仕留める。ゴリラ型、クワガタ型、特撮ヒーロー型だ。

その頃になってようやく攻撃に転じるキメラアントが出始めた。しかし、その攻撃もバラバラで統率されたものではない。

マシロは一匹一匹ナイフで殺していった。

10分も経たない内に6、70匹いたキメラアントの群れは全滅した。

「……………う、嘘、でしょ。……信じられない。一人で全部倒すだなんて」

ポンズが崖の上から降りてきた。その顔は驚愕に満ちている。

「ポツクルさんはいましたか？」

マシロの言葉に我に返ったポンズはポツクルをさがし始めた。

それを見つめるマシロの顔は暗かった。

キメラアントを倒してめでたしめでたしとはいかない現実がマシロの目の前に広がっている。

キメラアントが運んでいたおおよそ50人の人間の処遇だ。

何かの毒によって動けなくされているだけで、ここにいる全員が生きているのだ。

だが、50人を移動させる手段も無ければ、避難させる場所も無い。よしんばクルトとレイナの村に運び込めたとしても、あの村には50人も人間の面倒を見る余裕はないだろう。

どう考えても見捨てていくしかない。頭では分かっているけど心が納得出来なかった。

「マシロさん！ ポックルがいました」

ポックルを背負ったポンズが戻ってきた。

「……………分かりました。それじゃ、ここを片付けてから帰りましょう」

「え、片付ける？」

マシロは大きくて硬そうなキメラアントの外殻を筆り取った。それをスコップ代わりにして大穴を掘る。

程なくして出来上がったその穴にキメラアントの死骸を入れていく。

「何のためにこんな事を？」

「混乱と動揺の誘引。上手くすればキメラ<sup>奴</sup>アントの人間を襲う手を緩めさせられるかもしれないませんが、どこまで望めるものか」

一部隊の行方不明がどこまでキメラアントにとって衝撃となるかは分からないが、多少の時間稼ぎのためにマシロは殺したキメラアントを埋め、戦闘の痕跡も消した。

その行為も完了し、遂に決断しなければならぬ時が来る。

マシロはポンズが道の外れの森の中に運んだ人達を見る。

助けられる命と助けられない命がある。そう自分に言い聞かせてマシロは50人の人間を見捨てた。

木々を被せてキメラアントに見つからないようにしたのは、良心の呵責の表れか。

まさにこの地は地獄といえた。

異形の兵団に餌として家畜の如く屠殺される人間。折角それから逃れられても同じ人間に見殺しにされる人達。

清々しく晴れ渡る青空が、一層世界の残酷さを際立たせていた。

マシロの足取りは重い。



## ? No. 012 補充×痕跡

? 言い知れぬ不安がペギーを包んでいた。

「些細なことでもいい。本当に何も心当たりがないのか、ハギヤ」

「どれだけ聞かれても知らねエもんは知らねエよ。」

第一、1日やそこらザザンが帰って来ねエからって何神経質になってんだよ」

「これ程帰還が遅れた事は今まで無かった。何かあったのではないかと考えてもおかしくはあるまい」

我が強く、煩く言われるのを嫌うハギヤやザザンのような師団長の勝手を黙認していたのは、それでも女王へ献上する食料の調達は真面目にやっていたためだった。

「何かって何だよ。まさか人間にやられたってか? 下級兵の一匹二匹じゃなくて、ザザンを含めた部隊丸ごと!?!」

「あり得ないね」とハギヤが笑う。確かにペギーにもあり得る事ではないと思えた。しかし

「……お前も知っているだろう、不可思議な力を持つ人間の存在を。」

まだまだ人間には未知な部分がある。侮ってかかるべきではないと思うが」

「分かった分かった。部下に何か知らねエか聞いてやる。それでいいだろう。」

鬱陶しそうにそっぽを向いてしまったハギヤを残して、ペギーはその場を後にした。

ザザンが城から進発したのが一昨日。今だ帰還がないために搜索の兵を外にやつたがザザンはおろかザザン隊の下級兵一匹見つけることが出来ていなかった。

このところ不可思議な力を使う人間が「レアモノ」としてキメラアントの間で知れ渡り始めていたが、もしもその者達にザザン隊が壊滅させられているのだとしたら、その脅威度はペギーが考えていた以上になる。

その場合多人数のレアモノがひとつになつて動いたと考えられ、キメラアントに対する反抗作戦を開始したのかもしれない。

そうであるなら対策を講じなければならず、他の師団長と至急話し合わなければならぬ。食料の調達のために城の外に出る時には一層の慎重さが必要になり、複数の部隊を連携させて動かさなければならぬ。数が多ければレアモノ達も迂闊な攻撃は出来なまいだろう。その間に敵を捕捉し、撃滅乃至は捕獲する。レアモノを女王に献上出来れば王誕生への大きな貢献となるだろう。

召集をかけるべく城内を歩くペギーだったが、気の重さを感じてもいた。ザザン隊の未帰還をどれだけの師団長が重く捉えるか。先ほどのハギヤの様に事態を軽視する者のせいで足並みが揃わないことは容易に想像が出来た。師団長の中にリーダーシップ

を執れる者の不在は、女王を第一とするペギーにとって忸怩たるものがあつた。

銃をばらして掃除をしていた。

クルトとレイナの家である。マシロは貰つた端切れで銃の汚れを拭つていた。

装薬やカーボンといった発射による残留物だけでなく、泥や土埃、乾いた血液といった汚れもキメラアントから調達した銃には目立つた。手入れもせず撃つがままにしていたようだ。

救出したポツクルを拠点にしていた村に運び込んでから3日。キメラアントによる襲撃もなく村は平穩だつた。

キメラアントの毒によつて全身の自由を奪われていたポツクルだつたが、既に痺れを残しながらも僅かに動ける程度に回復していた。奥歯に解毒薬を仕込んでいたらしく、その周到さにはマシロも感心した。

「平和ね」

そう言いながらポンズがマシロの傍に座つて戸口の外の景色を眺めた。この3日、ポンはポツクルの看護をしていた。ポツクル以外の仲間を失つたことで暗さは残っていたが、ひとまずの危急を脱したことでその表情は和らいでいた。

「……NGLの外の人たちにキメラアントのことは伝わったかしら？」

「伝わっているとは思いますが。俺の名前で協会に連絡するようにロセスさんにはお願いしましたし」

心配なのは協会の受け止め方だった。

キメラアントという新種の生物が集団で人間を捕食しているという程度の情報しか持ち帰れていないために、その危険度を過少に評価される恐れがあった。人語を操る程知能が高く、秩序立って動いているという事はロセス達が脱出した後に分かった事であり伝えられていない。その上キメラアントの中にはオーラを感じ取れる個体もあり、念を使えるハンターといえども決して侮れる存在ではなかった。

多少危険な魔獣程度の受け止められ方をした場合、初動の早さや送られてくる人員の能力に不安が残る。

「この村にキメラアントの軍勢が現れるのも時間の問題ね……」

「……そうですね。どれだけの食料を必要としているのかは分かりませんが、村一つの人間を浚っているのだとしたら巢の周辺にあった村はもう残ってないかもしれませんね。」

「だから、あの蠍型のキメラアントが率いる部隊が巢から離れて遠出していたんでしょ」

「私達が確認した巢の大きさからいって一千近くのキメラアントがいてもおかしくはないわ。そんな大軍勢の一日の食料がどれ程になるのか……。」

明日あすこの村に現れたって不思議じゃないわ」

そうなったとしても村人へ被害を出さずに退けるつもりだったが、手元にある銃弾の数に心もとなさがあつた。鹵獲した時点で弾数が少なかったのに加え、ポツクル救出の際にも使用したためもう残りが一発分しかなかった。

「この近くに国の施設はありませんかね？ 国民に秘密にしていたり、立ち入りを禁止しているような厳戒な施設だといひんですか」

「そんなことを聞いてどうするの？」

「銃弾を補充したいと思ひまして」

「心当たりはあるわね。キメラアントの調査をしているときにいくつか見つけたの」

ポンスに教えられた場所は拠点の村から大分離れた場所にあつた。マシロの足ならば半日もかからずに行き来出来る距離だが、施設からは村よりもキメラアントの巢の方が近い。

善は急げと出発したマシロの目に道中入ってくるのは、緑豊かな大地と透き通る青空だった。陽の光と新緑の匂いに包まれていると今NGLで起きている事が遠い出来事のように思えてくる。村があつて、家族がいて、子供たちが笑顔を浮かべている。そん

な事を幻視させるような穏やかな日和のなかで、しかし施設に向かう道中には壊滅した村もあった。家屋や田畑は荒れ、打ち捨てられた死体は腐敗している。

到着した施設の中も似たようなものだった。物が散乱し、血痕はそこかしこに飛び散っている。施設は周辺に広がる畑の管理施設らしく、用具の保管庫や倉庫が併設されていた。建物の中にはライフル銃など機械文明を拒絶するNGLには存在する筈のないものが転がっており、この場所で後ろ暗いものを栽培していることを物語っていた。

ハンドガンの弾を求めてマシロは内部を探索していく。死体こそ残ってはいないが建物の中には鬪争の気配がまだ色濃く残っていた。見つけた弾は持っている銃に補充した後は、予備のマガジンを拾ったマガジンポーチが付いたベルトに入れて持ち運ぶ。

手早く用事を済ませたマシロは物見のために行きとは違う道程で帰途についた。

四囲を山に囲まれた様な地形の森を歩いてみると奇妙な光景に出くわす。森が円形に伐り開かれ、何十体ものカメラアントが一様に両断されて転がっているのだ。

「……念能力？」

直感的にマシロはそう思った。

切り株の高さを見ると全て同じ様な高さに揃っており、一刀で伐り倒された事を示している。円形だというのもその中心で何者かが鋭利な武器を使う様な能力を使ったと考えられた。

目の前に広がる様な光景を作る兵器に心当たりが無いマシロは、そう結論づけた。倒れたキメラアントの中には意識は無いがまだ息のある者もあり、この状況が作られてからそう長い時間は経っていないようだった。

「討伐隊……にしては早すぎるか」

迅速に討伐隊が組まれていたとしても今頃国境に着いたならまだしも、既にこんな深くにまで到達したとは考えづらい。

となると考えられるのはポンズ達のように調査に来ていたか、たまたまこの国に居合わせた念能力者かということだ。

地面の足跡を見つけてしゃがむ。

草が生えていて土がむき出しの箇所が少なく足跡から正確な人数は知れないが、足跡はキメラアントの巣の方角に伸びていた。国境に向かわず、巣に近づいていつているということはこの生物災害の大元である女王蟻を叩くつもりなのだろう。

少し思案してからマシロも巣へと足を伸ばすことにした。

敵地と呼べる中で为数少ない味方である。顔を繋いでおけば心強いし、情報の共有も出来る。マシロの持つ情報は少ないが手助け出来る事があるかもしれない。

延々と森が続く。木々が空を覆い多少薄暗くもあるが、藪が少なく草花の背丈も低いので見通しは困る程には悪くない。

注意深く進んでいると前方からこちらに近づくと気配を察知する。マシロはさつと木の上にも身を隠した。



## No. 013 ネフェルピトール×開戦

キルアの心には怒りが湧いていた。誰に対するものでもない。自分自身に向けられたものだ。

つい数分前、自分はゴンの恩人を見殺しにした。

そして今、自分は敵に背を向けて一目散に逃げている。カイトはゴンを無理矢理連れて逃げるという判断を肯定してくれたが、何のことは無い。自分が一番腰抜けだっただけだ。

襲撃者は念を使えるキメラアントだった。底知れない薄気味悪さを持ったそのキメラアントの襲撃に気づいたのはカイトただ一人で、キルアとゴンに逃げるように促していたその一瞬の隙で右腕を切り飛ばされていた。

自分の判断が間違っていたとは思わない。あの場に残っても出来ることは何も無かった。むしろ残ることこそがカイトの邪魔に他ならなかった筈だ。

だが、ならば何故自分はあそこまでカイトについてしまったのか。出来ることなど無いのに道中に出会ったキメラアントを基準にこの国で起きている出来事を安く見積もってしまった。

結果、カイトを見捨てて自分は逃がっている。

一つの判断ミスが最悪な結果を招く。己のミスのつけをカイトに払わせてしまったことで、キルアは自責の念に駆られていた。

だからだろう。人影が目の前に現れるまでキルアは全く気配に気づけなかった。

肝を冷やすがすぐに安堵に変わる。人影は見知った人物だった。

「驚いた。まさか君達とこんな所で会うなんて」

マシロⅡシロギヌ。ヨークシンでクラピカと同僚だった男だ。幻影旅団を退けたこの男のことをキルアは鮮烈に記憶していた。

この場で出会ったことは天の配剤かもしれない。マシロならばカイトを助けられるかもしれない。

「アンタの助けが必要なんだ……い。この先を行ったところでゴンの恩人がキメラアントと戦ってる。そいつは念が使えるキメラアントで、オレ達じゃどうしようもなかった……ッ」

キルアの表情は苦渋に満ちていた。自分の未熟さへの怒りと尻拭いを頼むことへの申し訳なき、そして助けが来た事で安堵している自分を恥じる気持ち。それらがごちゃ混ぜになってキルアの心を締め付けていた。

マシロはキルアを安心させるかの様に微笑んだ。

「分かった。俺に任せといて」

「……頼む」

キルアはその微笑に子供扱いされていると感じたが、同時にマシロを頼もしく思った。

遠ざかるマシロの背中を見送ってからキルアも走り出す。

キメラアントの巣があるNGLの奥地から一度も休まず駆け通したため国境を越えた頃には体力も尽きていた。気絶しているゴンを木陰に寝かせて自分も腰を下ろす。

安全圏まで脱出できた安心感も加わって、キルアは気が抜けた。

ぼうつと地面を見つめる。

カイトは逃げられただろうか？ マシロが救援に行つたとはいえ、直じかにあの邪悪なオーラに触れたキルアには希望が見出せなかった。

ゴンが目覚めた時になんと言えればいいのだろう。合わせる顔がなかった。

「ハハハ！ 最高だね、キミ！ もっと楽しもうよッ!!」

「……チツ」

敵の奇襲から始まったこの戦い、初手で利き腕を失ったことからカイトが押された状況で推移していた。

残った左腕も並以上に使えはするが、右腕程に感覚は鋭くない。何より右腕が無いことで攻撃にも防御にも一手足りず、敵の猛攻を凌ぎきるのにも無理が必要だった。

そういう意味で気狂いピエロ<sup>クレイジースロット</sup>で3番のワンドが引けたのは確かな助けになっていた。敵味方にバフ・デバフを掛けることの出来るこの能力でカイトは彼我の肉体的能力差を埋めながら戦っていた。

「へー、なるほどね。この光の動きでフェイントができるんだア」

そう言つてキメラアントはオーラの動きを真似しだす。このキメラアントはカイトとの短い戦闘の中で念の扱い方を脅威的な速さで習得していつていた。

猛攻を掻い潜りながらなんとか距離を空けるが、敵の跳躍ひとつですぐに距離は縮まりまた防戦一方になる。

ゴンとキルアを逃がすために十分に時間を稼ぐつもりだったが、カイトは己が撤退するのは困難だと悟っていた。撤退の隙が見出せず、無理に背中を見せても振り切ることは叶わないだろう。この場を切り抜けるには敵に追撃を鈍らせる程のダメージを与えなければならぬ。

身を切り裂かんと迫る敵の爪を、腕が伸びきる前に敵の懐に入つて避ける。身体を預

けながら肘で敵を打つ。僅かに開く合間。身体を背中方向に半転させて勢いをつけてワンドで殴る。その際一緒にデバフを掛ける。

敵がたたらを踏んだところに追撃をかけるが蹴りを放ちながら後方に転回されて避けられる。転回で地に着いた腕の力で一際大きく跳んだ後、敵はまたすぐさま距離を詰めてくる。

有効打に欠けていた。

脅威を与えられる攻撃方法が無いために、敵は大胆な攻勢に出てこられる。

デバフで敵のオーラを減らし、バフで自分のオーラを底上げしているとはいえ、元々のオーラ量の差が甚大なために通常の打撃では大したダメージは与えられていなかった。

ダメージを受けるのはカイトばかりで、決定打を受けていないとはいえ浅傷は全身に出来ていた。

「ほらほら、もう疲れたのかニヤ？　僕はまだまだ遊び足りないのニヤー！」  
「ぐ………ッ！」

攻撃が来ると分かってはいても右腕が無い事で防御が出来ずに切り裂かれる。

攻防の流れが途端に乱れ、なすがままに敵の爪の餌食になってしまう。もう一度敵の懐に入ろうとするが、軽やかにかわされ背中を切られる。次打の蹴りはワンドで防いだ

が踏ん張りがきかずに吹き飛ばされる。宙空で体勢を整えて、木の幹に足を着いて勢いを殺して着地。

「つ……………く、はあ……………はあ……………」

カイトの闘志は未だ萎えず、睨みつけるが敵の猫型のキメラアントはどこ吹く風だった。むしろますます笑みを深めた。

獲物を甚振<sup>いたぶ</sup>つて遊んでいる、そんな雰囲気だ。望むところだった。ゴンとキルアのための時間稼ぎを念頭に始まったこの戦いだったが、自分が絶対的に優位だと言いたげな敵の笑みを見てカイトの心中にある想いが湧き上がってきた。

〃余裕気なその笑顔に冷や水をぶっかけてやる!!〃

オーラをより強く練り上げる。今までは敵の攻撃をいかに受けないかを重視した戦い方だったが、今からはいかに効果的な状況で敵の攻撃を受けるかだ。

肉を切らせて骨を断つ。攻撃の瞬間こそ、意識的な意味でもオーラ的な意味でも間隙が出来る。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあるというものだ。知らずに口角が上がる。

両者が両者共笑みを浮かべている中で、しかしカイトが捨て身の攻勢に出る時は来なかった。

二人が対峙する空間に銃声が響く。森の奥からハンドガンを連射しながら乱入者が現れた。

突然の不意打ちにも関わらず、キメラアントは鋭敏な五感で捉えていたのかその一発目からの全ての弾丸を回避していた。乱入者は構わず突撃し、キメラアントもそれを迎え撃つ。

キメラアントの刃物の様な爪が振るわれるかにみえたが、乱入者に触れる直前何かに阻まれる。よく見れば青みがかった透明な壁が乱入者の前に展開されている。そこから二人の近接戦が始まった。

カイトはその一連を見つつも乱入者が現れた段階で、乱入者とキメラアントを挟みこめる位置へと走り出していた。常に乱入者と自分のどちらかがキメラアントの死角を取るという意図を持ったポジシヨニングとなる。乱入者もカイトの意図を察して位置関係を調節していた。それだけでも乱入者の実力の程がよく分かった。

キメラアントが死角を取られるのを嫌って強引に間合いを開けたのなら、その間に乱入者へとバフを掛ける。乱入者がキメラアントへと向かって行ったら自分は敵の死角に回って時折援護する。

そうやって二人掛りで戦ってどうにか目の前のキメラアントと戦っていた。

だがカイトにもこの均衡はいつまでも続かないと分かっていた。消耗の激しい自分が遠くない内に脱落する。そうなる前に光明を見出さねばならなかった。

そのカメラアントを視界に収めたとき、マシロは自分の腰が浮つくのを感じた。

今までに出会ったどの念能力者もが霞む莫大なオーラ量とそのオーラが孕む禍々しさに怖気が走った。対話も理解も不可能だと思える根本的な種族の溝を思い知らされるようなオーラだった。

“絶”を維持したまま木立に隠れてハンドガンとナイフの点検を手早く済ます。そして深呼吸をひとつ行い、集中力を高めてからカメラアントに奇襲をかける。

銃撃で敵が負傷する事などはなから期待していた訳ではないが、不意打ちの形になつたにも関わらずその全てを避けられるとはさすがにマシロも予想していなかった。

そのまま接近戦に移行。天狐ガレディウス・ウォールの産衣を使って相手の攻撃を上手く防ぎながら戦うが、マシロからの攻撃は敵にまるで通用していなかった。“周”で強化したナイフが肌を通らないのだ。表面を軽く傷つけるだけで、これ以上のダメージを望むのならばかなりリスクを取らなければならない。

カイトと連携して注意を散漫にさせる様な攻撃をしていると敵はそれを嫌って一旦距離を取った。

「ニヤハハハ、君もなかなか面白いね。ただの兵隊じゃ君達に勝てない訳だニヤ」

カメラアントは殺し合いの気負いなど微塵も無く、上機嫌に話しかけてくる。服に付



いた埃を払ってから伸びまでする余裕さだ。

「ひとつ聞く。お前は直属護衛軍の一人か？」

「そうだよ」

「王は生まれたのか？」

「それは君達は知らなくてもいい事だよ。君達は僕の力試しの相手をしていればいいんだニャ」

カイトが巢の中の情報を得ようとしたがやはり王の事となると口が堅い。

「人間を食料にするのは止めてくれませんか」

会話が出るのならもしやと思いい言ってみたが、キメラアントはマシロの言葉にキョトンとした。

「どおして？　この世のあらゆる生物は王と女王の下に統べられ、奉仕を義務づけられた存在なんだ。その命もお二人の物。お二人が所望されたのなら肅然と差し出すのが全生物の務めなんだよ」

マシロは内心顔をしかめたい思いだった。それが当たり前だと一点の曇りなく心の底からこのキメラアントは考えているようだ。人間との共存など望む足がかりすらない。最早キメラアントは一国を滅ぼしたと言ってもいい惨状を作り出した。何とかNGLで手を打っておかないと被害は世界規模で広がっていくかもしれない。

キメラアントが臨戦態勢をとりなおした。

「君達が女王様の邪魔をするなら、殺しちゃうよ」

地を蹴ったと思つた時には既に眼前に迫つていた。カウンターを合わせて腹を蹴り上げる。宙に浮いたキメラアントをカイトが更に蹴り飛ばす。

「悪いが前衛は任せるぞ」

ワンドが背中中に当てられる。マシロのオーラが漲り出した。

「制限時間ありのオーラ増幅だ。これを使って援護する」

「助かります」

作戦を話し合う猶予は無いため手短に言葉を交わして意思の疎通を図る。

木を足場にして移動しているキメラアントへ向けて気を研ぎ澄ませる。敵の僅かな意や動きを見逃せば致命的な代償を払うことになる。

戦いは本格的な殺し合いへと移行する。

## No. 014 劣勢×覚醒

猫型のキメラアントは銃撃は大した脅威にならないと判断したのか腕で防ぐだけで、避けもせずに呐喊してくるようになってきた。

攻防力の移動も熟練の念能力者と大差ない程に速い。マシロとカイトを手本にしているのか、戦いの中でどんどん念の技術が磨かれてきている。

眼前のキメラアントの顔面に右手のナイフを振るいながらそれを囷に左手の銃を腰溜めに腹を目掛けて撃つ。二ヶ所への攻撃を敵はナイフを左手で払い、右手で銃弾を受け止めて防いだ。

マシロはそれを認める間も無く跳びあがって蹴りを打つ。キメラアントは身を屈めてそれを避け、体当たりでマシロを吹き飛ばす。

「く……っ」

無理な体勢からのジャンプキックだったために、マシロは受身を取るのに精一杯だった。追撃に対して後手になってしまい、キメラアントも当然それを見逃さなかったが、カイトが横槍を入れる事で追撃を防ぐ。

カイトのワンドの能力は触れるだけでも発動するために、デバフを嫌うのなら避けな

ければならない。

「も〜、それ鬱陶しいニヤ〜!」

マシロはすぐに体勢を整えて、カイトと攻め手を交代する。

敵のキメラアントは元の四足獣らしい手を地面に着けるような低い攻撃が多く、それがマシロにはやり辛かった。天狐の山で子供の頃は魔獣を相手に組み手のような事をしていたために獣染みた戦い方に戸惑いは無いのだが、敵のキメラアントは魔獣と比べるべくもない程に俊敏で柔軟で鋭かった。

接近戦をしていると防ぎきれなかった攻撃でどんどんマシロの身体に傷が出来てくる。

だが劣勢という状況の中でマシロは不思議な昂揚感に包まれていた。

自分の全力の全力で挑んでも、それでもまだ高い壁として立ちはだかる敵を前にして徐々に戦い方が理想のものへと近づき始めていく。

すなわち“硬”と“流”を用いた常時攻防力100の究極戦闘術。

そこに到達しようとしていた。

これまでも幻影旅団戦の時に近い事はしていたが、しかしそれは敵の隙を突いたり隙を生み出すためで、それも数手に止ま<sup>と</sup>っていた。またその際も人間を惨たらしく殺す事に抵抗があつてか無意識のうちに手足などの直接命に関わりづらい部分を狙う事が

多かった。

だが目の前のキメラアントには遠慮する必要が無い。いや、遠慮する余裕が無かった。

明確な完全なる格上を相手にマシロの感覚はどんどん研ぎ澄まされ、遂に飛躍を遂げようとしていた。

「!?」

マシロのナイフがキメラアントの肌に入り始める。暴力的なオーラ量に物を言わせたキメラアントの防御力を「凝」で集中させたマシロのオーラが上回り始めたのだ。

未だ攻防力90程度と「硬」にはなっていないが近づいて来ていた。

そしてマシロの変化は異変としてキメラアントも感じ取っていた。何かおかしいと一旦距離を取ろうとするが、マシロはさせじと追い続ける。

しかし素の肉体的能力に差があるために、その強靱な脚力で距離を離されてしまう。

キメラアントは木を足場にマシロとカイトの周りを跳び回る事で攻撃のタイミングを掴ませず、迎撃の姿勢も崩そうとしていた。

背後を取らせず、なるべく前方に敵を捉えようと動いていたマシロとカイトの僅かな隙を見出したキメラアントは突撃する。

迎え撃つマシロ。

キメラアントがマシロの手前の地面に着地する。と、地面が爆ぜる。

爆発したかと錯覚させる程に地面を抉ってキメラアントは急激に方向を転換した。

向かう先にはカイト。

自分の右側からの激烈な突進に防御しようとするも右腕を失っているために間に合わず、胸から腹にかけて切り裂かれる。折れる身体。

カイトは木々の向こうへ蹴り飛ばされた。

キメラアントはゆっくりとマシロの方へ振り返った。笑っている。

「これで鬱陶しい力は無しだニヤ」

劣勢の中でもどうにか均衡出来ていたのはカイトの能力と、何よりカイト自身の確かな援護があったためだ。それらが無くなれば天秤は大きく敵に傾く。

だが、マシロも笑った。

「もう少し付き合って貰います」

銃をホルダーに戻す。

——もう少しで何かに手が届く。

マシロの目は敵を通して自分を見ていた。最早死がどうかキメラアント蟻がどうかは頭の中に無かった。

あるのは見えなかった景色がもう少しで見えそうだという胸の高鳴りと今まで築き

上げてきたものを振り返ってここまで来ることが出来たという歓び。

マシロの精神はある種の超越状態にあった。

そして、念は精神状態に大きく左右される。

「ぐ……ッ!!」

再開される戦い。キメラアントの前腕をマシロのナイフが深く抉る。

生まれて初めて感じる激痛だったが、キメラアントは怯みも見せずに攻めかかる。

振るわれる鉤爪。避けるマシロ。返す刀で振るわれた鉤爪を冷静に右腕で払って、がら空きの脇腹へと左腕で殴りつける。

オーラの防御を貫いてきた攻撃にキメラアントは声が漏れそうになるが食いしばって耐える。

カイトが掛けたバフ・デバフの効果が無くなり始めた状況でも、マシロの攻撃は確かなダメージをキメラアントに与えていた。

敵の隙を逃さず行われる何度目かの近接格闘戦はマシロが初めて押していた。

不思議な状態だった。考える前に“硬”で防御を行い、攻撃の瞬間には自然と“硬”を纏っている。

マシロは遂に理想を体現した領域へと到達した。

……が、その状況も長くは続かなかつた。何度か攻撃を受けるうちにキメラアントは攻略法を見出したのだ。

マシロが右拳から繰り出した殴打をキメラアントは避けずに受ける。同時にマシロの右腕は肘から先を切り落とされた。

「つ……ああ、あ、ッ!!」

どうにかキメラアントを蹴り飛ばして間合いを離すが、最早大勢が決したのは明らかだった。

“硬”を使っているときは他の部分が無防備になる。基本中の基本の注意事項だが、キメラアントが行った攻略法は人間には出来ない芸当だった。“硬”での攻撃を受ける、即、死だからだ。

避けながらのカウンターという手もあるが、それよりもマシロが“硬”から“堅”の状態に戻る方が速い。

人間が相手なら“堅”で足る防御も目の前のキメラアントには不足だったために“硬”を使ったが、しかしそれが仇となった。

“硬”を受けるといふ行為は、オーラ量も肉体的強度も隔絶している直属護衛軍だからこそ出来た事だった。

「君はすごい強かつたけど……もうお終いだね」



寂しそうにキメラアントが呟く。もう楽しかった遊びも終わりだ。

口からも血を流したキメラアントが重たげな足取りでマシロに近づいていく。

継戦の構えを見せるマシロ。まだ闘志は萎えていない。最期の意地とばかりにマシロは全力でオーラを練った。

「硬」での究極戦闘術は、もう出来ない。元々リスクの大きい戦い方だったが右腕を奪われた事で死線上进行し続ける自信を持ってなくなっていた。それでも隙があれば体外に頭在させた全オーラを一撃に叩き込むつもりだった。

まだ抵抗するつもりのマシロにキメラアントは笑顔になった。

マシロが機を窺っているとキメラアントの背後に体を引きずったカイトが現れた。手には不気味な大鎌を携えている。

カイトがアイコンタクトを送ってきた。跳躍するマシロ。遅れてキメラアントがカイトに気づく。大鎌が振るわれる。

キメラアントも跳んでかわそうとするが、上を取ったマシロに頭を押さえつけられる。

「な、!?!」

刃が迫る。キメラアントは上に逃げることは諦め、素早く地へと身を伏せた。ついでとばかりにマシロの手を取り引き込む。

大鎌の軌道上へと身を晒してしまおうマシロ。マシロも伏せようとするも数瞬遅く、左脛の中段より下辺りを斬り飛ばされる。

「はあ……はあ……くそ……っ」

大鎌が霧消する。肩で息をするカイトは地面に膝を突いて座り込んだ。

マシロは仰向けになって空を見ていた。

ここまで必死になっても倒せもしない敵の強さに笑えてくる思いだった。

キメラアントが立ち上がる。カイトとマシロの状態を確認している。

「人間がここまでしぶといとは想像してなかったよ。キメラアントの脅威に成り得る人間がいる。それが知れて良かった。すごく楽しめたよ」

マシロが銃を向ける。

「……なんのつもりかニヤ？ それは僕には効かないって分かったと思ってたけど」

事実ハンドガンは一度も有効打に成り得ず、牽制の役目がこの戦いでは精々だった。このキメラアントにとっては鬱陶しい豆鉄砲でしかなかっただろう。「周」で強化した弾丸をキメラアントはその身で防御出来ていたのだ。

マシロは構わずに引き金を引く。

キメラアントは避けもせず、手の平で受け止めようとした。

「!!!?」

だが、弾丸は手の平を貫通し、キメラアントの身体を食い破った。崩れ落ちるキメラアント。吐血。

肺に穴を開けたのかカヒューカヒューと異音をさせながら苦しそうに呼吸している。

「はあ……はあ……これで、真正銘死力を尽くし……切りました。……はあ……もう、ガス欠……」

最後の銃弾には、マシロの残っている全オーラを籠めた。その威力は今まで撃つていた銃弾の比ではない。

最後の一発の油断を誘うために、銃撃は脅威では無いと思込ませる布石を散々に打っていたのだ。奥の手の保険だった。通用して良かったとマシロはほっと胸を撫で下ろした。

「動けるか？」

カイトがのろのろと近づいてきた。

「……無理、ですね」

何とか身体を起こすマシロ。

キメラアントの巢の方を見れば、こつちに飛んでくる複数の影が見えた。

「行つてください。俺を抱えちゃ……逃げられません。それより、も、情報を討伐隊に持ち帰る方が重大、です」

「……………」

帽子を目深に被って表情を隠すカイト。その口元は強く結ばれている。

「ここから北東350キロ辺りに……村が、あります。そこに知り合いがいるので助けに、なつてくれると思います。」

……………それから、キルア君には気にしないでと伝えて、ください」

「……そうか、キルアの知り合いだったのか。」

俺の名前はカイトだ。良ければ恩人の名前を教えてください」

「マシロ＝シロギヌです。後は、頼みました……」

「感謝するマシロ。君と共に戦えて光栄だった」

背を向けてカイトは歩き出した。一度マシロの方を振り返ってから森の奥へと姿を消した。

マシロは改めて自分の全身を見渡した。

酷いものだった。浅傷から深傷まで全身至る所に何十箇所と傷をつくり、おまけに右手と左足を失った。

銃を握り直す。

「あ……あ、れ……？」

急に身体から力が抜け、起きていられずに倒れてしまう。体を動かそうとするが力が

入らない。

身体を起こそうという気力すら湧いてはこなかった。

「ネフェルピトー様！ ご無事ですか!？」

頭が回らない。

「あの人間、を、城へ運んで応急、処置を施せ」

「は！ は!?! いや、しかし。女王様へ献上なさらないので？」

ボーっとキメラアント達のやり取りを見ていた。

眠い。

「面白いことをね、考えたんだ」

臉がおりる。

マシロは暗闇に身を委ねた。